



INA VALLEY
FOREST
COLLEGE

INA VALLEY FOREST COLLEGE ANNUAL REPORT 2020

伊那市 50 年の森林ビジョン担い手育成事業



INA VALLEY FOREST COLLEGE
ANNUAL REPORT 2020





伊那谷フォレストカレッジ アニュアルレポート 2020

もくじ

はじめに	02
伊那市のこと	04
INA VALLEY FOREST COLLEGE について	06
2020年のカンキョウ活動のこと	08
INA VALLEY FOREST COLLEGE REPORT	
VOL.1 森と学びのつながり	10
VOL.2 森と教育	13
VOL.3 森とまちづくり	19
VOL.4 森と建築	22
VOL.5 森と素材	27
VOL.6 森と住みやすさ	30
伊那谷シニアの様子	36
課外授業のこと	38
講師プロフィール	40
受講生のこと	43
受講生フリエイターとしての森の映像	44
森に関わる100の仕事のこと	46
森に備わる価値の再発見	47
協議会メンバー紹介	50

森に関わる100の仕事をつくる

業界もエリアも越境して、森の価値を再発見しよう

INA VALLEY FOREST COLLEGEは、業界を超えて森の価値を再発見、再編集することを目指す「森の学び舎」です。森や地域をフィールドに、業界を超えた人たちによる、トークセッションやグループディスカッションなどを通して、森・地域の新たな価値を見出し、伊那谷に森に関わる100の仕事を生み出すことを目指しています。

現在、森林は様々な問題を抱えています。

森林産業に関わる人材は減少の一途を辿り、特に林業者は全国で45万人を下回り、さらに減少の一途をたどっています。

森林は地球の循環システムの中で非常に重要な役割を担っています。土壌保全機能、水源涵養機能といった森林サービスはもちろん、生物多様性の保全、教育的意義、リラククス効用など様々な役割を担っています。

しかし、多くの森林は放棄され、所有者の高齢化や後継問題、境界線の未確定など問題は山積し、待ったなしの状態になっています。

こうした中でこれからの森林産業界に必要なのは、包括的な担い手育成及び、他業界との関係性作りだと考えています。森林業界に止まらず、様々の方々と連携していく中で創出していくこと

が、これからの新しい森林づくりです。

木を伐るのであれば、バイオマスや丸太市場だけでない売り先をどうつくるか、森の中でレクリエーションサービスをするにはどうするか、他業界のサービスと森林を組み合わせることができないか、というような視点での担い手事業を行いたいと考えています。

森のプロフェッショナルはもちろんですが、デザイナーや建築士、教育、アウトドア、ITといった様々な業界の人たちが講師となって、受講生と共に森の仕事について考えます。

林業従事者を育成していく、ということももちろん重要です。セットで大切になるのは利用者側に、森の現実を伝え、選択が変化していくということ。

木材を使う企業側が、日本の森を生かし、海外に責任のある木材選択をしていくにはどうすればいいか。その一つとして考えているのは、森の現実を消費者が知り、自分で考えて選択を変えていくことです。

そうやって少しずつ森のことが社会に知られるようになっていくことで、選択が変わり、企業が変わり、森が変わっていく。そんな壮大なスケールの一步目を伊那谷から作ります。

2020年度は予定外の新型コロナウイルスの影響によって全てオンラインでの授業になりました。それでもこれまで森に繋がりしなかった人たちが、森で活動する人たちが出会い、課題を共有し、希望を語りました。

その記録をアニニアルレポートにまとめました。

伊那谷フォレストカレッジ事務局



伊那市とは

長野県伊那市は、「伊那市50年の森林（もり）ビジョン」を策定し、「伊那市ソーシャル・フォレストリー都市宣言」を行っています。

伊那市50年の森林ビジョン

伊那市の森林面積は55074ha、森林率は82%を占め、里山からアルプスに至るまで、広く森林に覆われています。南アルプスと中央アルプスに囲まれ、様々な森林域を有する地域です。

しかしながら、近年、森林整備が停滞している森林や、ニホンジカの食圧被害、松くい虫の蔓延などの病虫害、集中豪雨等による山地災害の発生など、現況の森林を取り巻く情勢には課題が多くなっています。

そこで、改めて現況の森林状態を把握し、課題を明確にすることにより、森林を健全で、豊かに、そして発展的に引き継ぐために、50年後の伊那市の森林の姿、市民と森林との関わり等について、市民参加による検討を行い、後世に引き継ぐ「伊那市50年の森林（もり）ビジョン」を策定しました。

ソーシャル・フォレストリーとは

伊那市の自然・森林を「資本」と捉え、これらを50年という時間軸で「社会資本」としての価値を高めて行くためには、「森林・林業市民」すべてが一つとなった社会であることが必要です。

「山（森林）が富と雇用を支える50年後の伊那市」を実現するために、伊那市は「社会林業―Social-Forestry―都市」として取り組んで参ります。

この活動を「伊那市50年の森林（もり）ビジョン」と共に継続していくことで、人材が育ち、「山（森林）が富と雇用を支える年後の伊那市」を築き上げると考えています。

森に対する民間発の取り組みも多い地域

伊那市は、山に囲まれたフィールドであり、森林面積が市の8割を超えます。伊那谷地域では、森林資源の有効活用事例が豊富です。

地域材に特化した製材所や地域材・県産材を使った家づくり。薪ストーブの普及率も全国屈指です。また、薪の配達サービスなども充実しており、薪ストーブが使いやすい環境も整ってきています。若手林業家も多く、林業家と建築士や製材所が連携して家づくりをする事例などもあります。

街の商店街では、花壇を地域の木で木質化するなど、様々な視点で森と地域の連携が進んできています。

さらに、隣村には信州大学農学部があり、森林・林業分野の研究も進められており、産学官連携も行いやすい地域です。大学生、事業者、大学、行政などが連携しながら、地域材利用、森に関わるサービス作りを進めていきたいと思っています。そして、伊那市、伊那谷から森に関わる様々な担い手が生まれ、山や森に関わる人が多いソーシャルフォレストリー都市を目指していきます。

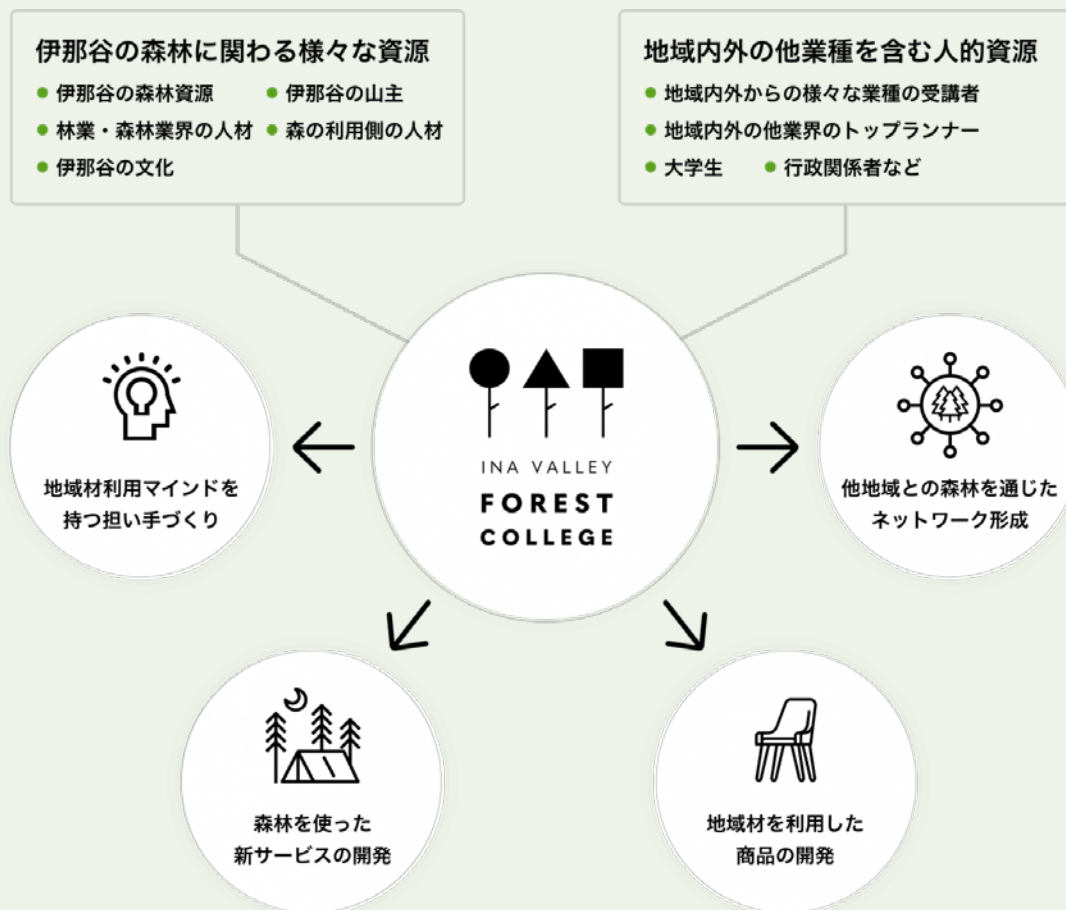
伊那市ソーシャル・フォレストリー都市宣言

平成28年2月、伊那市は「山（森林）が富と雇用を支える50年後の伊那市」を基本理念とした「伊那市50年の森林（もり）ビジョン」を策定した。

ビジョン実現のため、伊那市は市民を主役とした自立的な経済の循環を構築し、社会が森林を育て、森林が社会を豊かにする「ソーシャル・フォレストリー都市」を宣言し、以下の取組を実践する。

- 一 市民生活と共生し、市民が活用できる森林（もり）づくりに努めます。
- 一 市域の持続可能な経済発展を担う林業・木材産業活動を推進します。
- 一 森林が多面的機能を発揮するための住民参加を推進します。
- 一 森林資源・人材資源を育て、活かし、利用する循環社会を創出します。

平成28年9月27日 伊那市長 白鳥 孝



講師のみなさん



公開講座

「自然と共に生きる、を自分ごとに変えていく」「森のライターに聞く、森の“今”と“これから”の話」



辻井隆行さん



講座 Youtube



赤堀楠雄さん



講座 Youtube

伊那谷フォレストカレッジとは

伊那谷の森の価値を再発見・再編集する学び舎

伊那市は、50年後の未来を見据え、2016年に「伊那市50年の森林（もり）ビジョン」を策定しました。伊那市50年の森林ビジョンが目指すのは、「山（森林）が富と雇用を支える50年後の伊那市」を実現すること。

このビジョンを実現していくために、伊那市の森や自然を資本と捉え直し、この資本の価値を高めていく必要があります。

森林・自然の価値を高めるためには、森に関わる人たちが多様化し、森のさまざまな価値を再発見・再編集していくことが重要です。

そこで、これまでの視点とは違う、森の学び舎をつくらう、と INA VALLEY FOREST COLLEGE が始まりました。

業界もエリアも超えて、森に関わる人を増やし、森の仕事を生み出していく。そして、そこから生まれた仕事が連携・連帯しながら、伊那市の森を持続可能で可能性に溢れる場所にしていきます。

FOREST COLLEGE は、さまざまな視点で森のこゝを見つめ直す学校です。

講師も受講生も様々なバックグラウンドを持つ人たちが森をフィールドに遊び、学び、考える。この講座を通じて、伊那市の森、ひいては伊那谷、日本の森が面白くなることを願って。

第1回「自然を生かすものづくりとは」

講師： ●松本 剛さん 株式会社飛驒の森でクマは踊る代表取締役 COO
●丸尾有記さん KITOKURAS 代表
地域プレイヤー： ●中村 博さん 株式会社やまと取締役代表

第2回「キャリアデザインに森を生かすには」

講師： ●久保田雄大さん 四徳温泉キャンプ場 (Waqua 合同会社) 代表
●近藤 百さん 愛農学園農業高等学校教諭
地域プレイヤー： ●富岡順子さん コレカラボ-corecareerlab- 代表

第3回「森と人の関わりがうまれる「まち」のあり方を考える」

講師： ●植原正太郎さん NPO 法人グリーンズ COO / 事業統括理事
●岡野春樹さん 一般社団法人 Deep Japan Lab
代表理事 / 一般社団法人長良川カンパニー代表理事 / 株式会社電通
地域プレイヤー： ●田中聡子さん 伊那市地域おこし協力隊 / 伊那谷ふいーる エディター

第4回「地域で育った木で生かす建築を考える」

講師： ●大庭拓也さん 株式会社日建設計 設計部門 アソシエイト アーキテクト
Nikken Wood Lab 代表
地域プレイヤー： ●倉田政人さん 建築設計室ヴェクトル
●金井溪一郎さん 金井山素材代表

第5回「地域の木を地域で使うための製材所の可能性を探る」

講師： ●谷知大輔さん パワープレイス株式会社
●ヤマサキ マサオさん SHARE WOODS 代表
地域プレイヤー： ●有賀真人さん 株式会社有賀製材所代表取締役

第6回「これからの林業と生業を考える」

講師： ●原 薫さん 株式会社柳沢林業代表取締役 / 一般社団法人ソマミチ代表理事
●田口壽洋さん 合同会社やもり 代表社員 / 一般社団法人 STAGE 代表理事
地域プレイヤー： ●北原淳史さん 島崎山林塾企業組合

INA VALLEY FOREST COLLEGE 2020年度カリキュラム

フォレストカレッジは、実際のフィールドに出て参加者同士が対話、ディスカッションを通して、森への思考を深めるワークショップ・プログラムを行う予定でしたが、今年度は、コロナの影響もありオンラインでの開催となりました。

外部講師と地域プレイヤーで伊那を周り、その上クロストークを行い、その様子を受講生にオンライン配信。受講生同士でのオンラインでの振り返りを行いながら、森への見方、考え方を深めていきました。

1. 「伊那谷ツアー」外部講師に、実際に伊那を訪れてもらい、テーマにあったフィールド・現場を周ります (講師の方が現場を巡る様子は撮影・編集します)
2. 現地を視察後、外部講師と地域プレイヤーによるクロストークを開催します (リアルイベントとオンラインで両方開催→広めの会場で参加者を絞って開催。オンラインで配信も行います)
3. グループディスカッションの共有 (参加者同士がつながるように facebook グループを作成します)

タイムスケジュール

09:30 ~ 12:00 :	外部講師様と地元プレイヤー、事務局でフィールドを周ります
12:00 ~ 13:00 :	お昼休憩
13:00 ~ 14:00 :	配信に向けた意見交換
14:00 ~ 15:30 :	クロストーク (生配信)
15:30 ~ 16:00 :	受講生同士でオンライン意見交換 (振り返りと質問)
16:00 ~ 16:30 :	質疑応答とクロージング



森とものづくり——自然を生かす「ものづくり」とは
クロストークレポート

伊那をめぐる、語り合う

「森とものづくりの糸口」

文・田中聡子

地域にあるものを活かし
生まれる個性

事務局でファシリテーターを務める奥田さんの「伊那谷ツアーから、ものづくりのヒントはありましたか？」という投げかけからスタート。

松本さんは、他業種の仙醸から、ものづくりに通底する部分の気づきを得たと話します。「仙醸さんの酒造りは、米の発酵文化をしっかりと未来に残していきたいという想いがあったのと。減っている日本酒消費量にこだわるのではなく、日本酒づくりの技術や、地域にある様々な資源を含めて、今あるものを残していくという考えは、森林資源や木材にも通じるところがあると感じ、非常に感銘を受けました」。そ

れは、やまとわの経木が、伝統的な昔からの技術を復活させることに通ずる部分でした。

丸尾さんも仙醸の「今あるものを活かす」という言葉が一番印象的だったそう。「この姿勢が、地域ごとの『らしさ』につながっていくことのように見えた。木材も伊那谷にはアカマツ、飛驒には広葉樹、木がないうちにはうちなりの話があつて。みんなにそれぞれのストーリーがある」。

ホスト側である中村さんは、仙醸の工場を訪れ黒河内さんの話を深く聞いたのは、初めてだったそう。「山の伏流水、米、場所によって水が違うなど、森にも通ずる部分があつて、やはりすべてのものが循環していると感じた」。

木工製品をつくる「やまとわ」と老舗酒造りメーカーである「仙醸」、素材も、商品も違う2社。今回、2社を巡ったことで醸成されたテーマは、ものづくりの根幹に通じている部分でした。

各々の現場で感じる 木を活かす大変さ

木工職人としてスタートし、木に関わることで自分も山で木を伐り始めた、やまとわの中村さん。「木がどれだけ重たいか、どれだけ大変か、体感している。だからこそ、ものづくりに感じる、ずしっとくるような苦しみみたいなものは、すごくある。」といます。自社では、プロダクトを作るところまで手掛けているので、その上で「立場が違うとものづくりに対する目線が違う」と思っている」と続けます。

丸尾さんは、自分の担っている部分は、もう少し消費者側に近いという気づきがあったと話します。「私の仕事は、加工する部分に重きがある。食べ物でいうと畑の話というよりキッチンの話という感じです」。その立場で、日々格闘しているのは、工業化された製品との戦い。

建材、エクステリア材に多いMDF（中密度繊維板）ではなく、そのままの木の良さを伝えていきたいといいます。

木の個性を見出し、一点もののプロダクトを様々な人と組みながら生み出している松本さん。「山の中から木を選んで、一本ずつ出してくることは、本当に大変なこと。例えば、一本の木を選んで、普段の10倍高く買いますよっていわれても、その手間、コストを考えたら、難しいことが多い」と実感を込めます。

1000の仕事とともに、 1000の出口を創造する

大変だから、現状を変えない。それで止まってしまうって木が活きないと、3人の普段の実感から議論は展開されていきます。

今回、フォレストカレッジが掲げている「森に関わる1000の仕事をつくる」というところに、共感している」と松本さん。「一本一本ばらばらで、多様な木。例えば、この形しか使えないとなれば、残りの99は使えないものになるか、もしくは1に合わせるようになる。ただ、出口側つまり使い手側が100パターンあればまたマッチングできるじゃないか」と見出しま

そして、「木の多様性にあわせるには、大量生産をメインとした機械化はマッチしない。効率化されても、一つのパターンしかできない。木に合わせて活かしていくことができる、職人が大切だ」とも思っている」と続けます。

丸尾さんは、木編の漢字の話から1000の仕事への可能性を提示してくれました。「日本の漢字で、三水に続き多いのが木編。樺など木の種類、杓しやくなど木の道具、杖など木で作られた製品、村といった組織から、楽といった感情まで。木は、日本にたくさんある素材で、昔からそれに頼って生活してきた。エネルギーも道具も、組織すらも。日本人が、木とともに生活してきた民族であるならば、またもそれをやってみるのもそんなに難しいことじゃないと思っている」。

それを受けて奥田さんが、「そんな観点も深掘りしていくと、色々な仕事が生まれるかもしれないですね。もしくは、なくなってしまう仕事を現代に蘇らせるか。経木はまさにそれです」。今の時代だからこそ、必要とされる仕事が出てくるかもしれないと、木とものづくりへのヒントが生まれていきます。



伊那谷の森とものづくりに寄せて

初回の講座から、森と森じゃないものをかけ合わせてみてきた、可能性。それぞれの講師に、伊那谷の森とものづくりから今回の議論の着地の見解をいただきました。

丸尾さんは、「やはり、今あるものを活かしかるがすべてなのかなと思う。あとは、どの現場もそうだと思いますが、好きだったら、なんでもできる。好きなことつてもものすごいパワーが生まれてくる。今、置かれた場所でがんばること、そして好きなことをして生きること。人が動けば、化学反応で何か生まれてくると思うので、この先もみなさんと何かつながりが持てればいい」と結んでくれました。

松本さんは、「丸尾さんに全部いわれてしまった笑。同じです。森によって状況、まわりの環境も違うので、それぞれでできること、そこにあるものを使い切れば、おのずとそれが個性になる」。

中村さんも「同じ感想笑。飛驒の広葉樹があるからまちづくりになる。丸尾さんのところは

木がないことが強みになっている。伊那は確かに素晴らしい木はそんなに育っていないが、マツはたくさん育っている。そして、自分が持っているものを持っていく人となつていけば、道は開けると思った」。

最後に、ファシリテーターの奥田さんが、「その地域のを生かすと言うところに、いろんな人の意見や知恵がはいつていくことが大事なと改めて思いました」と、締め括りました。

REPORT VOL.1 森とものづくり

伊那谷ツアー動画



伊那谷ツアーで訪れた場所



株式会社仙醸



株式会社やまとわ

伊那谷の教育現場を感じ醸成される「森と教育への視点」

文・田中聡子

森と教育——キャリアデザインに森を生かすには
クロストークレポート

自然との接点が 余りにも減っている

事務局でファシリテーターを務める奥田さんの「森と暮らしが今遠いですよね。本日伺った上農の高校生も言っていました。森と暮らしが遠い今だからこそ、近付けていくには、教育がどんな役割を担い、どんな可能性があるのか話していきたい」という問いからスタート。

伊那谷にある中川村の森の中で、キャンプ場を運営する久保田さんは、「今年はコロナの影響で、県内利用者も増えたが、それまでは約95%が県外からのお客さん。お父さんお母さんも、自然に触れたことがない人がほとんど。だけど、自分の子どもには自然に触れて育ってほしいとキャンプに連れてくる方が

たくさんいる」と話し、生活が都市化しすぎて、生活の中に自然とのつながりがなくなり、自然に触れることがレジャーの機会しかなくなっているのではないかと危惧します。

そんな実感の中で、もっと人々を森の中へへと誘い、その人らしい個性、能力といったクリエイティビティを生み出せないかと、森林ガイドやサウナガイド、ログビルダーといった、森に関わる仕事も創出してきました。

「そんな活動から、教育的な要素を感じますか？」（奥田）

「すごく感じますね。利用者は、リラックス目的が前提だとしても、子どもの教育を目指し

ている人が多い。他にも、若い人たちは何か刺激を受けたいんだろうと感じます。街の刺激じゃなくて」と、ローマテリアル、いわゆる自然な素材から受ける生の体験を求めていると久保田さんは分析します。

大学で林業を学び、材木会社での営業を経て、今は農業高校で教員を務める近藤先生は、「体験的にしか人は学ぶことができないし、体験を日常化していくことが大切」とした上で、「体験が、もう一步踏み込むと暮らし。自分が暮らしている環境に、ある程度責任を負うというのが、暮らしの言葉の定義としては正しいと思う」と話します。

近藤先生が教壇に立つ愛農高校は、全寮制。近藤先生自身も敷地内に家族と居を構え、生徒たちと暮らしを共にしています。学校では、農業体験ではなく、自分たちが生きるための食糧を生産し、消費しています。「農業は、生産と消費のスパンが短い。林業もスパンは長いけど同じことで、人工林は、人が植えた木を人の手で手入れして消費する。それは、自分たちがサバイブする、つまり自分たちが生き伸びるためにやっている仕事」。

愛農高校では、生きていくために、体験の域など思いました」と、今日の話から気づきを得たといいます。今見えている社会の困難さを解決していくこうとする生きる力を描いていたが、コロナのような想像していなかった危機に直面した時にも乗り越えていける力を育んでいけたらと、心新たに語ります。

プロセスを見失うことは、 効率と合理の違いに似ている

奥田さんは「プロセスが見えなくなるのが問題なんですよね。野菜が育つ過程、森が育つ過程。さらには、木が伐られ、製材され、例えばここにある壁になっていくような、現実味がないから、先程の倫理の欠如にもつながってしまふのかもしれない」。プロセスを知らないことが問題ではないかと、議論を展開させます。

「効率と合理は違うと知っている」と近藤先生。「例えば林業なら、極端な話は木を伐るのは大変だから、木を植えなければいい。木よりも扱いやすいもので代用するという考え方が効率。しかし合理は、そこに木がある理、あることには見えない効果がある」と、自身の信念に触れます。

よりもう一步深いところで学ぶ教育を目指しているといえます。また、久保田さんの話を捉え、「キャンプ場はその学びを年齢層関係なく、社会的なイントロダクションとしてできるすごい機能を持っている」と、近藤先生。

自給力を見つめ直し、 サバイブしていく

奥田さんは「サバイブするって大事。人類として生き残っていくこうよって活動の中に、農業がある。食べること、暖を取ることに、まあエネルギーですよ。そこが、今ぼっかりなくなっているんじゃないか。自然との接点がなさすぎる」と、人間としての原点が失われていっていると、投げかけます。

三重県に住んでいる近藤先生は、いわゆる田舎と呼ばれる自分の県でも、第1次産業の従事者が減っていることに危機感を抱いています。「第1次産業従事者はほんとにわずか。このまま先細りしていったら、飯どうする？って話になるはずで。でも都市の人は、お金を払えば、ごはんが食べられると思ってる。それは、食べ物商品としてふるまっているから。食べ物には、余剰があるから商品としてふるまえる。で

近藤先生は、自ら小さい田んぼと畑をされているそうですが、その活動こそ「効率と合理」への想いから。「大きく農業をしている誰かに任せて、自分はお金を稼ぐところにエネルギーを注いだ方が効率は良いが、それは合理ではない。面倒くさいことも、みんなでちょっとずつやるのが、最終的にはサバイブすることにつながると思う」。

ちょうど合理性の話は、第一回目の公開講座の時に、パタゴニア日本支社の元支社長辻井隆行さんの時にもありました。「合理は英語で“Reasonable(リーズナブル)”っていうもんね、理由があるってことだよ」と言われ、「あー、確かに」と納得しました。効率は、エネルギーに対して、生み出される成果なので、全然意味が違う。でも、合理的っていうと微妙に悪いイメージを持つ人もいられるかもしれませんね」(奥田)。

教育的サービスではなく、 日常的教育

「森を教育にどうやって活かそうかと考えていたけれども、それ以上に、僕たちが次の世代を生きていくには、サバイブするための教育を

も僕ら生産現場にいる人間としては、いくらお金を払っても、飯が食えない可能性があるかもって思うわけですよ」。專業じゃなくてもいいから、林業でも農業でも、ある資源の中で自分たちがどう食べていけるかを考え、実践することは必要ではないかと提言します。

それを受けて久保田さんが、「個人的な面でも社会的な面でも、自給力の無さが今の時代の課題だと思う。都市に人口を集めておけばいいという時代に違和感を持つ人たちが、自給的に地方で暮らしはじめている」とし、「原体験を持たない大人も含めて、原体験を取り戻さなきゃいけない。そういう体験こそ教育だ、という雰囲気を感じる」と続けます。

「テクノロジーが発展し、様々なプロセスが簡単に済むようになっていく中で、想像力が欠落し、最終的に倫理が崩壊していくのではないかと、社会的にも問題視されてきていると久保田さんは言います。

「生きる力」に繋がる学びを目指し、高校生や社会人のキャリア支援を行う富岡さんは、「教育現場でも、アクティブラーニングや自分が主体的になる教育にシフトはしてきているものの、サバイブする力には、まだまだ繋がらない

考えていくのはマストだという気がしてきました。暮らしの中に、森も農も、そのものがあるという話から、学校の中で実感されていることはありませんか？」(奥田)

まさに、暮らしの中での教育を実践している近藤先生は、都市型の生活から来た生徒の話聞かせてくれました。「親から農的なものが素晴らしいと聞かされ、生徒自身も素晴らしいのはわかるけど、なんか自分の中でうまく飲み込めないで来る子もいる。ある生徒は、男子寮の前で自分の畑を始めました。育っていく大根をみて、どうしたものか、どうやって食べようかと考え、料理好きな同期に渡して調理してもらったり、余った大根はたくわんにしたり。そういうしている内に、農場に行くのが楽しくなってきた。こんな風に、農業が大事だという直感が自分の体験として降りてくるまでは、実は結構時間がかかるんです」。

さらに、「自然に対する自分の直感が大事だと思うことを、愛農やキャンプ場のような環境を使って、四苦八苦しながらバイパスでつなげていく作業」という近藤先生の言葉から、暮らしや自然の中にある教育の形という、ヒントが見えてきます。

「教育的サービスじゃなくて日常的教育。それには自然が大事で原体験が大事という話があった中で、久保田さんから子どもの宿題が多過ぎるといふ話も聞きました。それについてはどうでしょう？」(奥田)

キャンプ場を運営している村で、暮らしている久保田さん。森を維持し、仕事を作っていくことを繰り返して、村で自分たちなりにサブイブしてきた中で、自身の娘が1つの結果かなと話します。1歳半からキャンプ場の傍らで育った、現在7歳の娘さんは、薪風呂の風呂焚きが大好きだそう。「この夏にキャンプして、彼女が変わったのは、学校の帰りに杉っ葉を持って帰ってくるようになった。キャンプでの体験として、杉っ葉が燃えることがわかったんですね。学校の宿題が多すぎて、そういう時間が取れないのも一方あったりする」。そんな実感の中で、教育がどういうものを目指していくのか、そして地域ぐるみの共有や大人の対話を通じた理解が課題ではないかと、久保田さんは続けます。

「今日伊那西小に行って、学校のあり方と地域の森へのサポートがすごく調和しているのを見て、ああいう一つの教育ターンを共有できる

大人の学びは、安心できる コミュニティをきっかけに

「学校教育という子どもたちの話をしてきましたが、教育は生涯教育とカリキュント教育のような一生涯続けていかないといけないテーマもあります。大人が自然体験をしてきていない世代にもなり、大人に対しての森と教育のテーマもあると思いますが、その辺りはいかがでしょう？」(奥田)

キャンプ場で自然や森を通して、学びの場を提供している久保田さんは、「例えば、確立されていないジャンルとしては、林業体験。農業体験はあるけど。あと、お客さんにすごい聞かれるのは、『みんなどうやって生きているの、田舎で』。僕もサラリーマンで仕事辞める時に思いましたけど、仕事がなさそうと。でもそれができるんだと、最終的にお客さんでも移住した人が結構いるので、(キャンプ場は)そういう入り口にもなるのかなと」。

大人の学びの入り口にもなっているキャンプ場。愛農高校に感じる共通点について近藤先生は、「愛農の母体は全国愛農会という農業集団。

のはいい。学校林が、コミュニケーションという意味でも、教育のあり方としてもいいと思う」と、森をフィールドに、クリエイティブティを育む形に感銘を受けたそう。

それぞれの持ち場で考える、 教育について

「クロストークの前半は、森と暮らしというテーマで話してきましたが、実際に富岡さんが教育の場で活動する中で、森に期待していたことや教育現場で課題とされる問題を、森がアプローチできそうなことって、何かあると思いますか？」(奥田)

「受験があることで、受験勉強をゴールにして教えてしまっているのが課題かなと思っています」と富岡さん。最近、伊那谷では「Most Likely to Succeed」というプロジェクト型学習のアメリカの実践事例をテーマとした教育ドキュメンタリー映画の上映会が頻繁に行われている話題から、主体的な学びに議論は展開。富岡さんもこの学び方に大賛成だといいます。

「学科がなくて、ひとつのテーマをみんなまで探求していくと、結果的に物理や数学の知識が

その事務所が、まだ愛農の敷地の中にあるんですよ。大人をターゲットにした雑誌やセミナーのほか、愛農の敷地を使って企画をしていたりもします」。ほかに、外国人大学生の受け入れや、伊賀で新規就農をしたい人が愛農で助手として働き新規就農につながった例も話してくる中で、「愛農って、コミュニティ兼学校というか、ターミナルみたいに成立しているの、誰がきてもいいし誰が学んでいいもいい」。

それを受けて「安心できるコミュニティがあるってことですね」と久保田さん。転妻カフェという転勤妻たちの語らう場を提供している富岡さんも「そうですね。つながることで安心が生まれ、安心が生まれたら次は学びへ」と、安心できるコミュニティが大人の学びの基盤になるのではないかと、共通項を感じさせます。

「大人に対してどういうアプローチをしているのは結構難しいですよ。自発的に動かないと絶対学べないし。」(奥田)

そんな投げかけから近藤先生は、「僕は内田樹さんが大好きで、愛農にも来てくれたことがあって、今年出してくれた『日本習合論』という本にも愛農のことをわざわざ書いてくれた。

必要となってくる方法。すると、通知表がないので、大学入試が心配になってきてしまう。」(奥田)

「そういう教育は、評価が問題になり、受験の時にどの基準で合格させるのが難しく、入試改革が進んでいかない」、そのことにジレンマを感じるといふ富岡さん。一方、見学した伊那西小について「森を題材に、想像力、表現することを大切にしていたし、正解がないから、何をやっても間違いはない。そういう環境で、子どもたちが、自己肯定感を育んでいくのはすごくいいなと思った」とし、中学校、高校とこの教育が途切れないで続く流れが欲しいと感じたといいます。

久保田さんは、「昔の学校は、知識の詰め込みだった。その知識を応用する力は、もしかしたら昔の人の方があったのかもしれない。今は、知識は携帯なんかで簡単にアクセスできるが、応用力をつけるバックグラウンドがないように感じます」とした上で、「どうしたら、学びが変わるのかは、それぞれのポジションでやっていくしかないと思っている。小さなアクションが大切」。実際久保田さんは、村に自分で打診し、年に2日間、環境教育を受け持っているそう。

内田さんの言葉に『現実と理想に引き裂かれることによって、人はイノベートする』という話がある。『すごくわかります』と奥田さん。

でも、と近藤先生は、「理想があるかどうか、今の時代大事で。現実には引き裂かれないままドロップアウトしてしまう。我慢して我慢して、結局どこにいったらいいかわからないし、もし新しい価値観を発見してそれにすり寄った時に、今までの自分を否定しなきゃいけないって結構怖いことですよ」、そして、大人の学びってある意味勇気がいることと続けます。だからこそ、こんな世界に住んでいきたいという理想を、色々な人に伝えたり、理想をイマジネーションしていくことが大事だと言います。「それを制御してきたのは、今までの教育かもしれないなとも思う。好きになっても誰も言ってくれなかった」。

「森と教育の可能性」の話題から、サブイブするという人間の本质や倫理、コミュニティがあつての学びなど、広く深く展開したクロストーク。受講生同士のグループディスカッションの時間を経て、講師陣からのまとめに移っていききました。



森と教育の可能性に寄せて

最後に講師の3人から、伊那谷と森と教育のテーマで、本日を終えた見解をいただきました。

近藤先生は、「ひとつ特徴としては、空隙（くうげき）つまり隙間がここにはすごい多いと思った。僕らは一緒に生きていかなければならないのは間違いない。各々が心地よいと感じる空間を求めて集まれる広さがここにはあると思った。山と関わらざるを得ないという性格を持つ地域でもあると思う。かなり変貌する要素が多いし、規模的にもちよつどいい。だらつと、山からまちまで続いている。だらつと感があるって、日本人ばくていい。だらつと感が、まちと森をつなぐという意味では、可能性があると思った。空隙とだらつと感がもつともつと、森の方へ引っ張っていく要素としてプラスだと思った」。

久保田さんは、「民俗学とか宗教学が好きなのもあって、太平洋から諏訪湖まで歩くのを毎年やってきた。人の気質としては、上流にいる人ほど、精神的なものの高さを重視している。海辺の人はもっと大らかだったり、コミュニティが上手だったり。上流の人は、精神

の源でもあると感じていて。命、精神、生活が山とひとつにつながっている。日本で、本当に森の国で、地理的にいうと造山運動が激しくて大陸の東側にあるからすくく雨が降り、森が多くて、森が育ちやすくて。精神的にも森は非常に大事なところなので、これを見つめ直して、手を入れていくことで、やっぱり僕たちの心も救われていくところもたくさんあるんじゃないかと。伊那がそういうところになったらいいな」。

富岡さんは、「学校であれだけ森があるとか、すでに教育と近いところに森がある環境がある。やまとわのような森に対してアツい人が多い地域も珍しいんじゃないかとも思っていて。もつと地域の大人がそれに対する対話をする機会がすくくほしいと思った。そこが密になっていくことで、森と教育の近さが生まれてくると思ったので、できることからやっていきたいと思います」。

REPORT VOL.2 森と教育

伊那谷ツアー動画



伊那谷ツアーで訪れた場所



長野県上伊那農業高等学校



伊那市立伊那西小学校

高まる地域材ニーズを満たすための「共同購入」

森とまちづくり——森と人の関わりが生まれる「まち」のあり方を考える クロストークレポート

文・北笠航太

植原さんと岡野さんは、木を生かしたまちづくりを通じて、森の産業創出と森の持続可能性を実現していく、「キノマチプロジェクト」を共に推進。「まちと森がいかしあう関係」が成立した地域社会「キノマチ」を目指している。

田中さんは、価値がないとされて放置されている流木でクリスマスツリーを作ったり、オーナメントを作って、そこで得られた収益を山に還元される仕組みづくりなどに取り組んでいる。そのほかにも、移住してきた4世帯の家族（建築士夫婦、デザイナー夫婦、農業と編集者、電力会社に勤める夫婦）が共同で土地を買って地域の木材を使って家をつくる「みんなの丘」プロジェクトを始めている。そんな田中さんの暮らしプロジェクトに対して、南阿蘇に移住する予定だった植原さんは興味津々。

植原：すくく最先端な暮らしだと思いました。具体的にはみんなの丘でどんな暮らしをしているんですか？

田中：地域材を使った家づくりの他に、蓄熱や耐熱ができる仕組みを作って極力エネルギー効率の高い暮らしを試みたいねとみんなで話しています。あとは生ゴミをコンポストにして肥料にしたり。

植原：これまでコーポラティブな場所を都市で作ることはありましたが、最近ではコロナもあって、都会のセンスを持った人が地域に移住して、そこで小さな共同体が生まれ始めていますよね。まさにみんなの丘プロジェクトはその好例だと思います。地域なら薪を使ったりして

エネルギーの自活もできますしね。

奥田：植原さんは南阿蘇にこれから移住されるようですが、暮らしと森を近づけていくために、あったらいいなと思えるサービスは何かありますか？

植原：午前中に話を聞いた薪宅配サービスなんてすごくいいですよ。あとは、地域材を使って家を建ててみたいとなった時のために、地域材に気軽にアクセスできるサービスがあるといいですね。

奥田：前の講座でも地域材を使った家を作りたいのに地域材にアクセスできなくて困っている人がいました。

植原：地域材って安い外国産材と違って比較的高価なこともあるけど、これまでは都会をターゲットにした商売が多かったように思います。でも、最近は田中さんたちのように意識の高い人が地域に移住し始めているので、地域材を地で使いたいというニーズが高まりつつある。そのギャップを埋めるサービスがあれば、暮らしと森を近づけた暮らしを選ぶ人は増えると思います。

仕事を増やしていきたい。

奥田：植原さんや岡野さんのように、都市と地域の間に入って、地域の価値をうまく翻訳する人が増えたら、地域のポテンシャルはもっと活かせそうですね。

一度は分断された私たちの暮らしと森。しかし、意志ある地域の人々や、コロナによる価値観やライフスタイルの変化によって、私たちの暮らしと森を再び紡ごうという動きが少しずつ、しかし着実に日本各地で広がり始めている。こういった草の根の取り組みがいつか、大きなうねりとなり、里山の暮らしが当たり前だった昔の日本のように森とまちが近く、関わりの多い社会になっていくかもしれない。

奥田：林業サイドの意見としては、まだまだ地域材を使いたいと言ってくれる地域の消費者が少ないので供給に踏み切れないところもあるみたいです。

植原：みんなで声をあげたほうがいいかもですね。マーケットありますって(笑)。その意味でも田中さんの取り組みは面白い。移住者4家族が共同購入すればそこその量の地域材になるだろうから製材所側も嬉しいだろうし。意識の高い移住者も増えて、点ではなく、面になっていけばスモールビジネス的に地域材を提供するビジネスモデルも作れるかもしれないですね。

都会から地域への移住が増えれば、 まちと森は自然と近づく

岡野：地域に移住者が増えている話で言うと、電通が最近自社ビルを売却することになったんです。リモートワークが増えて東京の本社に行く意味もなくなってきた。だから、僕も今はほとんど岐阜県の郡上にいます。そういう都会側のリモートワーカーが地域にたくさん移住するようになれば、森と暮らしは自然と近づいていきますよね。

奥田：都会から地域への移住が増えることで、森と暮らしが近づいていくというのは面白いですね。

岡野：地域には魅力的な仕事がないと言われるので、仕事が増えればもっと地域に移住する人は増えると思うんですが、地域って打ち出し方次第で、色々仕事を作れると思うんです。SDGsとかの流れもあって、環境共生とか持続可能性って都会よりも地域の方が学びやすかったりする。僕も自然の中で遊ぶ中で本当に学びが多いんです。

植原：僕も環境教育ってこれからすごく増えていくと思いますね。子どもを自然に触れさせたいとか、サステイナビリティを学びたいとか都市側の地域に対する需要はかなり高まっている。ただ、都市側と地域側でその需要と供給が一致していないのが問題じゃないかな。都市側の言語に翻訳してあげる人が地域に足りていないと思うんです。

岡野：僕はビジネスの領域にもいるので、SDGsとかサステイナビリティのような横文字を使いながら、郡上の自然を生かした企業研修の提案などをしていますね。そうやって地域の

REPORT VOL.3 森とまちづくり

伊那谷ツアー動画



伊那谷ツアーで訪れた場所



上牧里山づくり



株式会社 dld



森と建築——地域で育った木で生かす建築を考える
クロストークレポート

木こりと建築士、地方と都心で一緒に 見出す「地域材を使う価値」

文・田中聡子

循環と機能性、
風景から考える木の建築の良さ

事務局でファシリテーターを務める奥田さんの「テーマは森と建築。建築にも色々種類がありますが、建築士として、木の建築の良さはどこだと思いませんか？」という問いからスタート。

ここ伊那谷で設計事務所を構えて15年目。住宅での地域材利用に積極的に取り組む建築士の倉田政人さんは、「建築材には鉄骨やコンクリート造がありますが、なかでも木だけが自然のなかで循環する素材。また、住宅は人が生活する空間なので、木と肌が接触することを考えても、体にも良いと思う」。

有明体操競技場など大規模な建築に日夜携わりながら、同時に小径の材木を使った木材ユニット「つな木」プロジェクトを手がける大庭拓也さん。「有明体操競技場でも、各所に木を使っています。外装は、木が持つ断熱性能や遮音性能を活かしながら、断熱のためだけに使う断熱材とは違い、木を見せながら機能を担保しています。また、木はとても軽く圧縮に強いので、アーチ構造に使うと合理的です」。

生き方に迷い20代で世界を旅したあと、地元伊那市に戻り林業を始めた木こりの金井溪一郎さん。「世界各地で見た人々の暮らしや風景に心を打たれ、地域の風景は地域の文化や独自性、魅力、誇りからできていると感じて、地域の風景をつくっていた木造の民家や里山のある

風景に興味を持った」と、林業の仕事についての根底の想いを語ります。

大庭さんは、日本の昔ながらの風景を維持するには、家の軸組も関係しているといい「伝統工法である木造軸組工法であれば、家の改修は繰り返せるが、現代的な2×4（ツーバイフォー）工法だとそれは難しい。昔の民家で主流だった木造軸組工法は、改修ができる余地があるので建物として新陳代謝ができ、結果として風景を守っていきけるのではないか」と見解を示します。

「機能性や循環、リノベーションの視点で考えると、新材材は自分では手が加えられないですもんね。」（奥田）

大庭さんは、「その時々々に最適な形にゆるやかに対応していくセンスがなくなってしまう」と、新材材の台頭もそうだが、世の中の完璧な機密性を求めるなど、物事を完結型にしてしまっているという視点を投げかけます。午前中のツアーで立ち寄った倉田さんの家を例に、「外の薪がなくなっていたら、『今寒いから倉田さんは薪をたくさん使っているんだろな』というような、生活感がにじみ出る風景は

素敵だ」と、移ろう生活感が大切じゃないかと話します。

江戸末期頃に建てられた古民家を自分で改修しながら住んでいる金井さんは、「住宅を改修して思ったのは、改修でできたものは一つもゴミにならない。燃やせるし、そうでないものも土に還っていく。環境に負荷がかからないことが、木の建築の一番の良さ」。

木の使用量のバランス・
森ごとのバランスを取る

実際に、木造建築の家を選ぶ人は増えているのかといえば、倉田さんの現場の肌感としては、「木造を選ぶ人が多い。でもそれは、予算の都合で木造の方が安いので選んでいるという印象です」。

大庭さんが日頃携わる中大規模建築では、逆に木造は建築費が高くなる一方で「10年前に僕が入社した時は、木造なんてほとんどなかった。現在では行政側の働きかけで、木材利用促進法とか公共施設には木を使いなさいという条例も出ています」。さらにSDGsの文脈や、政府が表明した「カーボンニュートラル」の指針にも中大規模建築が貢献できると感じているそう。

しかし、中大規模建築で木を使うと、JASの材料を使わなければいけない、ホウ酸やリン酸を使った不燃処理をせざるを得ず、木の風合いもなくなり、値段も吊り上がる。さらに、加工可能なところが限定されると都市で使うハードルも高くなるなど、難易度が高くなり課題も山積み。

今回の講座に合わせて住宅の木造比率を調べてくれたという倉田さんの話では、「令和元年度の住宅着工戸数は、全国で木造が約58%で非木造が約42%。長野県では木造が約74%で非木造が約26%、平成元年度は木造が約57%で非木造が約43%。木造が減っていると思っていたが割合だと木造は増えている。しかし、地域材で家を建ててほしいというオーダーはない」という倉田さんの話から、地域材という概念がまだまだ浸透していないことがわかります。

「山側の話も聞いてみたいのですが、地域の木を地域で使うという山側のメリットを金井さんはどう捉えていますか？」（奥田）

金井さんは、昭和36年に伊那市にある旧長谷村で起きた36水害※を例に出して議論を展開し

ます。

昭和36年は、高度経済成長期。多くの人が住宅を建て全国各地の山から木が伐り出された時代。薪などの燃料利用もされていたので、住宅の近くにも禿山ができて、それが水害を加速させました。

「対して、現代は木が使われなさすぎる。人工林でいえば、畑の野菜と同じように、木も収穫時期がある。今、戦後に植えられた木が全国的に収穫時期を迎えている。いい時期に収穫しなければ山が荒れていってしまう。そんな山が近くにあれば、危険を及ぼしかねない」と、現場にいるからこそリアルな危惧を金井さんは抱いています。

金井さんが調べてくれた資料では、日本の木材使用料は、紙や建築材なども含めて1人あたり一年間で0・6m³(中くらいの木1本程度)。使用量のうち自給率は約36%で、あとは輸入。自給率は増加傾向にあるものの、日本の山にある体積は年々増えているのに、輸入に頼っているというバランスの悪さが課題。

大庭さんは、「仮に全部国産材を利用しようとなったとき、実際、今の山から木を収穫でき

るのかなと。すごく急峻で山の上の大木を取りに行きたくても道がない」。

「確かに急な斜面まで無駄に植えたのが日本の林業だと感じている」という金井さん。加えて、圧倒的に林業従事者が不足しており、担い手も減少の一手を辿っています。

「道が近い、入りやすいところから皆伐が進んで、そこがまた水害にさらされる可能性があると思います。単純に需要と供給のバランスだけじゃなく、森ごとのバランスを見ないとどうしようもない。きめ細やかな木こりがたくさんいないといけないですね。」(奥田)

地域材を住宅や都市建築で使うには

「地域の木と地域の住宅、都市建築が紐付いていくことが大事だと思うが、ほぼそれが進んでいないのはなぜでしょうか？」(奥田)

構造材としての地域材が、地元の木建材業者でほとんど扱われていない、つまり流通がない現状にぶち当たったという倉田さんは、「地域産材にこだわらずに注文すれば2週間程度で揃

うが、地域材の構造材はほとんどない状態。それで、山側の金井さんや有賀製材所の有賀さんに相談したんです」。

倉田さんは、地域材を手に入れて、一年半かけて乾燥させることもあるそう。「住宅を建てる時でも、長期スパンで材料調達の話ができるといいし、もっと言えば、住宅の需要に対する建材としてのストックがあるのが理想的。そうすれば、住宅の計画段階から地域材を使いましょうという提案もできる」。

大庭さんが感じている地域材と都市建築が紐付かない理由としては、「都市建築では、木材の耐火対応が必要。欧米で主流の石膏ボードで木を被覆する加工もあるが、木の表面が見えなくなるので、建築士としては木を見せたくなくなってしまう。その部分を割り切れれば、その課題は少し軽減されるのかな」。

「エリアの木をつかいますよ」という話をすると、処理をするのに、エリア外にもっていかなければいけなくなるという話もありますね。」(奥田)

地産地消について、日頃からテーマに感じているという大庭さん。「地産で地消なのは間違

いないのですが、加工だけエリア外でやっているケースがあります。最近、僕が伝えているのは『地産地工』。加工を地元でできないと、地産地消はできない」。

林業と建築がつながり、地域材を使う価値を生む

「山側からすると地域なりエリアなりで木を使ってもらう良さを直接的にどう思いますか？」(奥田)

材木を運搬する時にでる排気ガスが減るなど環境的な視点もあるとしながら、金井さんは、「地域の木を使うと建物に独自性を出せるのではないかなと。伊那の木であるカラマツの建物はあかっぱくなったり、アカマツが曲がった梁になったり」。

大庭さんが携わった選手村ビレッジプラザでは、全国から木が届き、同じ樹種でも色などの違いを見ることができたといい、「農業的な産地がある材料で作る建築空間は、鉄やRCにはない魅力だと思います。僕も含めユーザーが学んでいくと、新たな価値が見え、ブランドになっ

ていくかもしれない」。

大庭さんの話に応えるように金井さんは、「建築側だけじゃなく、山を育てた山主や木を伐った自分も、木がなんの建物で使われたか知ることとは嬉しい。それがわかれば、山にももっと愛着が持て、また森づくりががんばろうとなる」。

「そういう意味では、すでに金井さんと倉田さんでダイレクトな設計と林業をつなげているわけですね」と大庭さん。

「森を健全にする建築とはどういうものなのかと考えると、1つは地域の木はなるべく地域で使う、地域と消費者をどうつなげるか、外国産材を使っているところをどう代替えしていくか。今回、話したことがたくさんあり、収まりきらなかった感じもありますね。」(奥田)

森と建築に寄せて

最後に講師の3人から、森と建築のテーマで、本日を終えた見解をいただきました。

「自分も感心があるテーマでいろんな話が聞けて有意義でした。自分としては、地域材を安さで勝負できないかと考えていたし、木こりと

して力をいれたいとは思っていたが、『木が好きななら高くても買う』と言ってもらい、木の良さや魅力をもっと伝えていきたいと思いました。木の良さはひとつひとつ違うし、地域によっても違うので、それを知ってもらえば、自然と普及していくとも感じた。地域の木や森のものが地域で使われることにより、それぞれの地域の風景が独自性を持って、地域の魅力を高めていってくればいいな。全国の地域がそうあってほしいと思っています。」(金井)

「地域材を使うハードル、触れる機会、知るチャンス、顔が見える、人と人とのつながりが、今回ワードとして聞こえてきました。自分も地域材を使いましょうという話をするが、実際にお施主さんが木を切りにいくという会社があるのも参考になった。山に関わるとかつながらとか、もうちょっと身近に地域材を感じられるような提案を計画段階で出していかなければいけないなと感じました。」(倉田)

「建築の世界では、建築計画といってゴールを決めてそれに対して何かをつくるんですが、計画じゃなくて、常に変わり続ける生育的なデザインにすごく興味があって。都市集中から地方へ分散したり、何が起るかわからない中で、



都心と地域の境界面が曖昧になっていきそうな
気もしています。僕としては、そういう考え方
で、地方のみなさんとつながって、全体として、
奪い合いではなく、開いてつながって何か起こ
すことに尽力したい。今日はきっかけとして種
を植えた状況だと思おうので、ぜひ引き続きお仲
間にいられていただいて、色々教えていただけ
らと思います。」(大庭)

※36水害：昭和36年(1961年)、台風の接近
と梅雨前線の停滞による激しい雨で、伊那谷の
各地で川が氾濫し、土石流や地すべりが発生し
た甚大な被害を及ぼした災害のこと。

森と素材——地域の木を地域で使うための製材所の可能性を探る
クロストークレポート

縦も横のつながりも弱い、 日本の林業

文・北埜航太

奥田：今日はよろしくお話しします。午前中
は有賀製材所、木平さんにインタビューを行
いましたが、午後からは日本各地のプレイヤーの
皆さんと地域材の活用をテーマにディスカッ
ションできればと思います。ヤマサキさんから
自己紹介をお願いしますか？

ヤマサキ：ドイツの木材メーカーの営業を12
年間ほどやっておりました。4、5年ほど前に
日本の林業と出会い、衰退を知って。それをな
んとかしたいと一念発起して、林業と消費者
をつなげる、カホンプロジェクトを立ち上げま
した。林業関係者も消費者も一緒になって、み
んなで地域材でカホンを作って、演奏するとい
うイベントです。そのうち、うちの森林組合
でもやってよ」という風の声がかかるようにな

り、全国でカホンプロジェクトをやっています。
木材の流通はいくつもの行程を経るし、時間
がかかるので、なかなか消費者側が供給側との
接点を持ってない。しかも、供給するプレイヤー
同士の横の繋がりも全然ないんです。それも大
きな問題だと思っています。

奥田：林業関係者の横の繋がりが弱いという
ことですか？

ヤマサキ：そうですね。工務店から、地元で
製材したいんだけど、この辺りで製材所を知ら
ないか？”ってうちに相談が来るくらいです。
地域の林業関係者同士の横の繋がりが弱く、弱
いことが分かりました。なのでカホンプロジェ
クトでは、消費者だけでなく、林業関係者も一

REPORT VOL.4 森と建築

伊那谷ツアー動画

伊那谷ツアーで訪れた場所



金井山素材



建築設計室ヴェクトル
一級建築事務所

堂に集まってもらって、供給側と消費者という縦の繋がりでだけでなく、供給側の横の繋がりを作っていくことで、網の目状にネットワークを紡いでいくお手伝いをカホンを通じてやっています。

奥田：谷地さんも地域内の林業プレイヤーをつなげる取り組みを行なっていますよね。

谷地：パワープレイスの谷地です。はい、地元製材所や地域の加工業者を巻き込んで、彼らと一緒に地域材を使った公共建築を作る、地域内林業の活性化コーディネートを行なっています。山形県高畠町の図書館建設プロジェクトでは21の地域事業者をコーディネートして、地域材の利用率99%を達成しました。地域材を地域企業と共に活用することで、地場産業の活性化にもつなげるこの取り組みは、「タニチシステム」と呼んでいたが、令和元年度版の森林・林業白書でも紹介されました。

奥田：組み合わせで事業全体で林業を支えているんですね。

谷地：そういう地域の小さな循環と、地域材の魅力発信の両方が大事かなと思いますね。「木材を使うとSDGsなんだ」というよりも、製材所を覗いたり、木材を切る人からそのこだわりを聞いたりする方が実感がともなうってずっといい。なので、僕はYouTubeとして木材の魅力発信するチャンネルを開設しようとしています（笑）。

有賀：製材所だけだとなかなか情報発信まで手が届かないので、谷地さんのような人が応援してくれるとありがたいですね。谷地チャンネル、楽しみです。

「SDGsだから」よりも、「目の前の人のため」に地域材を使う

奥田：タニチシステムのような取り組みを始めたのはなぜですか？

谷地：出来上がった木材建築が地域から愛されるためには、建築のプロセスそのものも大事だと思えます。ただ地域材を使うだけとか、デザインのおしゃれに見えるだけでは足りません。どんな思いで地元の木こりさんや地元製材所がこの図書館建設に関わったのか、そういった背景が見えることで出来上がった地域材の木材建築や地元山に対する愛着は育まれていくと思います。

奥田：皆さんが地域材の活用にごままで取り組まれているのは、なぜなのでしょう？ ビジネス的に大変な部分もあるかと思いますが。

谷地：環境問題とか、SDGsとして地域の山を守ろうというよりは、「人」ですね。頭で考えるモチベーションよりも、もっと実感に近い動機です。林業と違って下請けや孫請けが当

一般的には、地域材よりも海外産材を使う方が「合理的」と言われる。たしかに、安くて気軽に手に入る外国産材は忙しい現代人にとっては「楽」な選択肢だ。けれど、今回の取材で感じたのは地域材を使う、その過程で得られる満足感や「楽しさ」だった。手軽さや安さは「楽」だけれど、私たちはそういった暮らしの中で、「楽しさ」を失っていないだろうか。楽と楽しさの、どちらがほんとうの「合理的」だろう。そんな地域材をめぐる取材を通じて、自分が本当に求める暮らしを問い直す貴重な機会になった。

たり前の業界なんですけど、僕の中ではそういう風に間に入って利益を得る不労所得に対する反骨芯があるんです。真つ当に林業をやっている人にきちんと還元されてほしいという思いがあるから、地域材の活用にごこだわっています。

有賀：うちは「せっかくなら地域材を使いたい」と言ってくれるお客さんのために頑張っていますね。だからこそ、地域材を活用するためにも、うちのような地域の製材所が残っているければと思います。やっぱり地域材の活用って経営的にも難しいし、課題も多いですが…。

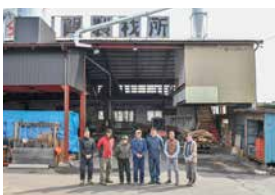
ヤマサキ：うちは、神戸の六甲山の製材所と仕事をしているんですが、そこでカフェを併設した製材所を始めたんです。意外とそれが地域で人気になって、今ではむしろカフェのお休みの週2回だけ製材所が稼働している状態です。カフェがあることでこれまで地域材に関心なかったお客さんも来てくれていて、そこで「端材市」をやったりもしています。製材単体だと難しいから、組み合わせで相乗効果を狙っていくイメージです。

REPORT VOL.5 森と素材

伊那谷ツアー動画



伊那谷ツアーで訪れた場所



株式会社有賀製材所



木平英一さんのお宅



森と生業づくり—— これからの林業と生業を考える
クロストークレポート

林業とアウトドア事業から感じた

「暮らしづくりは生業づくり」

文・田中聡子

木こりが語る

林業という産業の現状

事務局でファシリテーターを務める奥田さんの「原さんは林業と里山地域づくりを掛け合わせている。田口さんは利用側から山側の現状をかえていくアプローチをしている。北原さんは林業がある種、趣味と捉えている。みなさん、林業が産業としてきついなと思っている。何が、林業の難しさなんだろう？」という問いからスタート。

長野県松本市にある株式会社柳沢林業で代表取締役を務める原薫さん。女性の木こりとして一線に立ってきた経験から、実感のこもった言葉が溢れます。「一年中木を切っているのは、

補助金に合わせているから。いつもあくせくしていないながら、利益につながらない。山の価値と木の価値を多様化して、価値を高めたい気持ちはあるが、そもそも林業だけで一年間食っていく必要があるのかと思っている」。少しずつ、森林業や農林業のような〇〇×林業のスタイルになるのが理想だと話します。

〇〇×森から「森に関わる100の仕事をつくる」ことをこのフォレストカレッジで提唱してきた奥田さんは、「年間を通しての産業をつくる。夏には農業、農閑期の冬が林業。色々組み合わせて、生業として成り立つ。昔に戻していく感じですね」。

広告とアウトドアの他業界を経て林業の世界

出し方は工夫していった方がいい」と力を込めます。

「フォレストカレッジの講座としては、今回の林業が最終回。林業がどういう産業なのかわかっていない人もいると思う。そのあたりを説明してもらってもいいでしょうか？」(奥田)

北原さんの現場での話として、一立方メートルの丸太を山から搬出にかかるコストは、平均して6500円〜8000円。売上の平均が一立方メートルあたり約7500円。つまり山主に売上を返す余裕がないという。「補助金が出ると、かろうじて山主に返せる。高く売れるか、搬出コストを下げるかの二択。搬出コストをこれ以上下げるのは結構無理がある。国としては、高性能な林業機械を投入すべきの方針もあるが、解決策としては好ましくないと感じている」。やはり木材を高く売るか、木材の需要を増やすことが大切だと投げかけます。

「出口側の売値が上がらないといけないわけですね。逆に行政側の主張としては、木材単価をあげるの難しから、作業効率を上げるために機械を導入してほしい。午前中のツアーで林道の話もありましたが、機械重量が3〜5ト

ンなら横幅2.5メートルでいいけど、もっと大型になると4〜4.5メートルの道をあけていかなければならない。」(奥田)

今の日本の林業システムがヨーロッパをなぞっていることに、違和感を覚えているという原さん。「地震と台風がほばないヨーロッパ大陸に対し、日本は避けて通れないわけで、同じシステムを導入することに限界があると私は感じている。さらに、国有林でいうと、一番生産性が低いのはこの中部山岳エリア。中央構造線や糸魚川―静岡構造線が通って、地殻変動をすごく受けているところなので、簡単に林道をあけられない」。

山側にお金がまわりづらい 日本の林業システム

「木をたくさん使いたしようという議論をする」と、山側に換金されない議論が抜け落ちる。前々回(フォレストカレッジVOL.4)の「森と建築」講座の時も、都市での建築物に対してたくさん木を使おうとすると、不燃処理をした木を使うしかない。加工業者はすぐ儲かる仕組みだが山主には返らない。山主や木こり、山側にどうやってお金を返していくかが、大きな課

へ踏み入れた田口壽洋さんは、「最初に感じたのは、自分の家の山を整備するのに補助金をもらえるんだ。すごい世界だな」という率直な感想を持ったそう。一方で、林業は成り立たない、儲からないと、関係者から聞く日々。そこで気づいたのは、林業には出口対策があまりされていないこと。

広告業界は、例えばどんな人にどう売っていくのか、そこにアプローチするために情報発信をする手法。林業は、生産側には補助金が投入されているが、出口側のプロモーションがあまりされていない。「もっと出口を作れば、生産側に補助金を入れなくても単価があがっていくんじゃないか」という田口さんの話を受け、木こりの北原さんは「本当にその通りだと思います。木こりはみんな感じていると思います」と応えます。

作業した面積に対して補助金が払われるが、北原さんは「丸太の売値が高くなった方が山は良くなる。木こりは、より良い造材をしようと思おうし、より高く売ろうと工夫もする、効率よく搬出しようと思う。意識として、補助金をもらうための作業ではなくなってくる。現状、補助金がないと厳しいところはあるが、補助金の

題だと思う」(奥田)

補助金と丸太の売上だけが収入源である林業。山主にお金を返し、林業従事者にも相応のお金が払われるために、丸太の売値を上げられる可能性があるかについて議論は展開されいてきまず。

「消費者の立場に立つと丸太の売値が上げられれば、影響がでてくるのは、一番木を使う家の値段。家を買えなくなるのは困るから、売値をただ吊り上げるのは難しい」(原)

さらに原さんは、山を維持管理していくことの難しさも大切さも同時に考えなければならぬと言います。「次の山をつくっていく経費も必要。山主に換金するだけでなく、一部を林業事業者が預かり金のような形でもらい、造林費用に当てていくこともやらないといけない」。

自伐型林業の可能性についても、議論が繰り広げられました。

山主とタッグを組み、自伐型林業を実践している田口さんは、基本スタイルとして、小さい機械で、少ないコストで、小面積で利益率を上げていくことを目指しているそう。「生産量を

あげて売上を上げることと、生産コストを下げることは全く同じことだと思っている」。

大きい機械は、機械代と燃料代が高いだけでなく、少しぶつけただけで車一台買えるくらいの修理代がかかることもあるそう。補助金で、高い機械を入れてしまえば、そういった維持コストをかけて使い続けなくてはならないリスクを感じているそう。

さらに田口さんは、自分の移住生活で見えたコストの変遷に合わせて解説してくれました。東京から島根県津和野町に移住した田口さん。まず始めたのは、家計簿をつけること。「年間100万あればいけるぞとわかった。田舎は、びつくりするほど家賃が安くて、一万くらいのところもある。例えば東京で、4人家族で住むマンションを借りたら、15万とか20万とか家賃がかかる場合がある。もちろん一概には言えませんが、200万くらい年収が少なくて済むわけで」。田口さんは、暮らしに足りる分、例えば林業でもコンパクトに必要な分だけ稼げれば、あとは自由な時間だと考え、気持ちにも余裕が持てたと言います。

「自分で山に入れる山主は、ほとんどいない

問いに対し、インターネットの環境整備をしたら、ワーケーションや在宅勤務もでき、地方で仕事ができるという話があるが、実際はそんな単純なことではないと言います。

「例えば、漁村の成り立ちを考えた時に、漁村には海があり、魚を獲る人がいて、加工する人がいて、流通する人がいる。その人々には家族がいて、暮らしを支える郵便局や商店があり、漁村という集落ができる。山村で考えれば、元々山を使ってできていた集落のはず。だから、現代の暮らしで山を使わずにインターネットがあるから、いけるねってことではないと思う。」山村が成り立っていた昔との違いは、エネルギー源として山の木々を使わなくなったのが、一つ大きな理由ではないかと田口さんは言及します。「石油、電気、ガスで、熱源が得られるようになった。家計の出費だが、その分のお金が地域から出ていっているということ。薪で賄っていた時は、エネルギー源分のお金を稼ぐ必要がなかった。例えば、薪を自分でとってくれば、自分の人件費、時間は使うけれど、コストはかからない」。地域の資源をどう活かしていくかが大事だと田口さん。

「山村を生かした産業があるといいですね。今日も北原さんからは、山の中で枝打ちした枝葉の使い道のアイデアがほしいと言っていた。原さんからは、細い間伐の檜がほしいという話が出た。山の色々な使い方がないと仕事が生まれていかない感じがします。」(奥田)

地域資源を活かきる取り組みが 「コミュニティと生業を生む」

話題に上がったエネルギーや林業機械だけでなく、さまざまな技術が発展してきた現代。地域でお金をまわし、地域資源を使うために「丸ごと昔の暮らしに戻しましょう」というのは無理があるから、今の技術を使いながら、昔の知恵を取り込みながら暮らしをつくっていくことはできるかもしれないと話が進んでいきます。

「暮らし方を昔に戻すわけではなく、アップグレードしていくことは、森の問題と非常に密接につながっている。暮らし方が変わらず、仕組みだけでは変わらない。原さんが実践されている里山地域づくりも新しい暮らしづくりということでしょうか？」(奥田)

のが現状。対して、山に入ることを一年のライフスタイルとして暮らしたい人はたくさんいると思う」。原さんは、そんな実感の中から林業と並行して立ち上げた一般社団法人ソمامチのなかで、みんなで森を共有し森を生かす「シェアフォレスト」を実践されています。それは、林業を暮らしに取り入れるための仕組みづくりであり、自伐型林業へもつながっていきそうです。

現代にあった山村を活かす 産業をつくれぬか

「山は本当に森林サービスというか、公益的機能がたくさんある。山主だけの責任にできないし、補助金が必要な部分もあると思います。完全に競争原理にまかせたら山がなくなる可能性だってある。田口さんがお話されていた、山が成り立つには、地域の資源を使う必要があるという話が面白いと思いました。聞かせていただけますか？」(奥田)

地方創生の文脈で、中山間地域での仕事創出も手掛ける出口さん。地方に人を呼び、地方でどう仕事を作って暮らしってもらうのか。そんな

地域の人を巻き込み、里山整備の活動もしている原さん。自社で整備をすれば、里山は早くきれいになることはわかっているけど、それでは山は変えられないと思っていたそう。「地域の人たちからは『定年後の遊び場つくってくれてありがと』『生涯現役で体を動かせるように地域の人たちと何かをする場があることが嬉しい』と感謝していただきました」。

ボランティアでは続かないと思うからこそ、薪の販売、農業や花木の栽培、落ち葉の活用など、現金に変えられることをみんなで考え続けているそう。「定年した方や障がい者の方、子供を抱えたお母さんたちに作業を手伝ってもらい、コミュニティと小遣い稼ぎの場になっている」と原さん。

「地域の中で地域の資源を活かきるさまざまな仕事が生まれることで、森の価値があがっていく。そこから、木の値段が上がるところまで行ければさらにいいですね。」(奥田)

都会に住む人の 山や森への関わり代とは

「フォレストカレッジの受講生の中には都会側から参加している方も多くおられます。持続可能なような森の難題は田舎側の話で、都会の人たちは直接動けないという話を結構聞きますが、都会側からできるアクションってあるんでしょうか？」(奥田)

「ずっとやりたいなと思ってるのは、林業体験の受け入れです」と北原さん。都会から家族で遊びにきて、お父さんに木を伐ってもらったり、子供には重機に乗って遊んでもらったりと、家族で山を楽しんでもらいたいと思います。「都会の人が、少しでも山に興味を持ってくれて、帰ってから山の面白さをまわりの人に発信してくれたら、山っておもしろいっていう都会での意識が広がるかもしれない。興味さえ持ってもらえれば、山は自然とよくなっていく気がする」。

「無関心の状態を関心のある状態に変えるということですね。都会も田舎も経験している田口さんどうですか？」(奥田)

まずは、信州ならではの山に関わる仕事を創っていきたいとおもった。今回の講座だけのつながりじゃなく、この縁を信州でひとつの形に創っていったらと思いました」。(原)

「遠くまで来させていたでよかったです。今日話を聞いて、山や森林との距離をみなさんがすごく感じているのがわかった。実際に林業に入った身としては、言う程、遠い仕事じゃない。そこはまず意識でのハードルが上がっている部分がある。それから、日本はやっぱり所有権の考え方が強いのがひとつの課題。山主が誰かわからないから、勝手に山に入れないという考え。まずは、伊那市が入れる場所を整えていくこともできそう。」(田口)

「山との距離を感じている人たちに、親しみを持ってもらえるように山側から手助けしていきたい。例えば、人が自由に入れる山を山主さんと話して確保して案内したり、林業体験を受け入れたり、技術の指導をするなどの活動をしていきたい。興味がある人は連絡をもらえれば、なるべく対応していきます。林業はとってもしパンが長い仕事。野菜は種を蒔いたらその年のうちに収穫ができるが、林業は60年くらい経たないと収穫できない特殊な業界。これから

「同じく、都会の方に知ってもらう場所を作る必要があると思ってる」。農業や漁業に比べ、林業が一番わかりにくいと思ってるという田口さん。「北原さんが、趣味は林業って言うていましたが、確かに林業はめちゃくちゃおもしろい。林業の要素は、ロープワーク、チェーンソー、エンジン、重機などがあり、しかも自然のど真ん中でやることを考えると、『アウトドアの集大成』だと思う」。

さらに田口さんは、林業に携わることで見えた、視点の話聞かせてくれました。「現代は、時間を効率的に使うために分業が進んだと思ってる。確かに、一つのこと集中した方が、新しい発見があり、掘り下げていくことができると。コミュニケーション全体でうまく回っているときは、集団としては進化しているが、個人としては退化してない?と思っただけです。何かあった時の自分の無力さといった怖かった。だから、一つのこと突出していなくても色々なことができる方が、生物として安心。その感覚は、みなさんに知って欲しい」。

原さんも、とにかく林業を遠い世界だと思わずに、まずは都会の人にも遊びにきてほしいとのことを考えるのなら、子供たちに少しでも山や林業に興味を持ってもらいたい。僕の理想は、子供たちがやりたい職業ランキングに林業をいれたい。まずは僕がユーザーバーになってね。みなさん、チャンネル登録してくださいね(笑)。(北原)

「今回、講座のなかで林業の話最後に持ってきた。林業の話はとっつきにくいからもあるんですが、それだけじゃなくて。色々なことを学んできました。ものづくり、教育、まちづくり、建築、素材。そして新しい仕事を生み出すとした時に、木こりがいないと何もできないことに気が付くと思うんですね。森を見て、木を切れる人がやっぱりいる。色々な仕事が増えてくると、木こりの仕事も増えてくる。最後に林業がいかに重要かをみなさんに知ってほしいと思っただけ、こつこつ順番にできました。今日の話は面白かったなと思いました」(奥田)

林業が楽しすぎて趣味⇨林業になった北原さん、海が好きで森に辿り着いた田口さん、人間の本質を大切に、自然(じねん)という概念の中で生きる原さん。自分がどう生きていくかを鮮明にしていくことが、生業につながっていく。「暮らしぶりは生業づくり」。

いいです。「知識としては、環境や森林を知っているけど、それがちゃんと腹落ちするために、やっぱり体験と感動が必要。林業もアクティビティになると思う」。

森林セラピー、森林を活用した人材育成、企業のCSR活動としての森林支援、オフィスの木質化。「都会の人が関われる山や森の可能性は色々あるし、これからニーズは高まっていくのではないかと原さんは言います」。

「難しく考えすぎず、まずは森に来てほしい。関わり代はいくらでもある。森の担い手は下降しているから、多様な関わり方で、ライフワークとしての林業もあり。もちろん危険な部分は大きいので、安全保障やマネージメントは大事だが、チームでやっていければいいと本当にいいなと思う」。(奥田)

林業と生業づくりに寄せて

最後に講師の3人から、林業と生業づくりのテーマで、本日を終えた見解をいただきました。

「今、小さくてもすごく多様な日本列島なのに、同じような林業のやり方をせざるをえない。

REPORT VOL.6 森と生業づくり

伊那谷ツアー動画



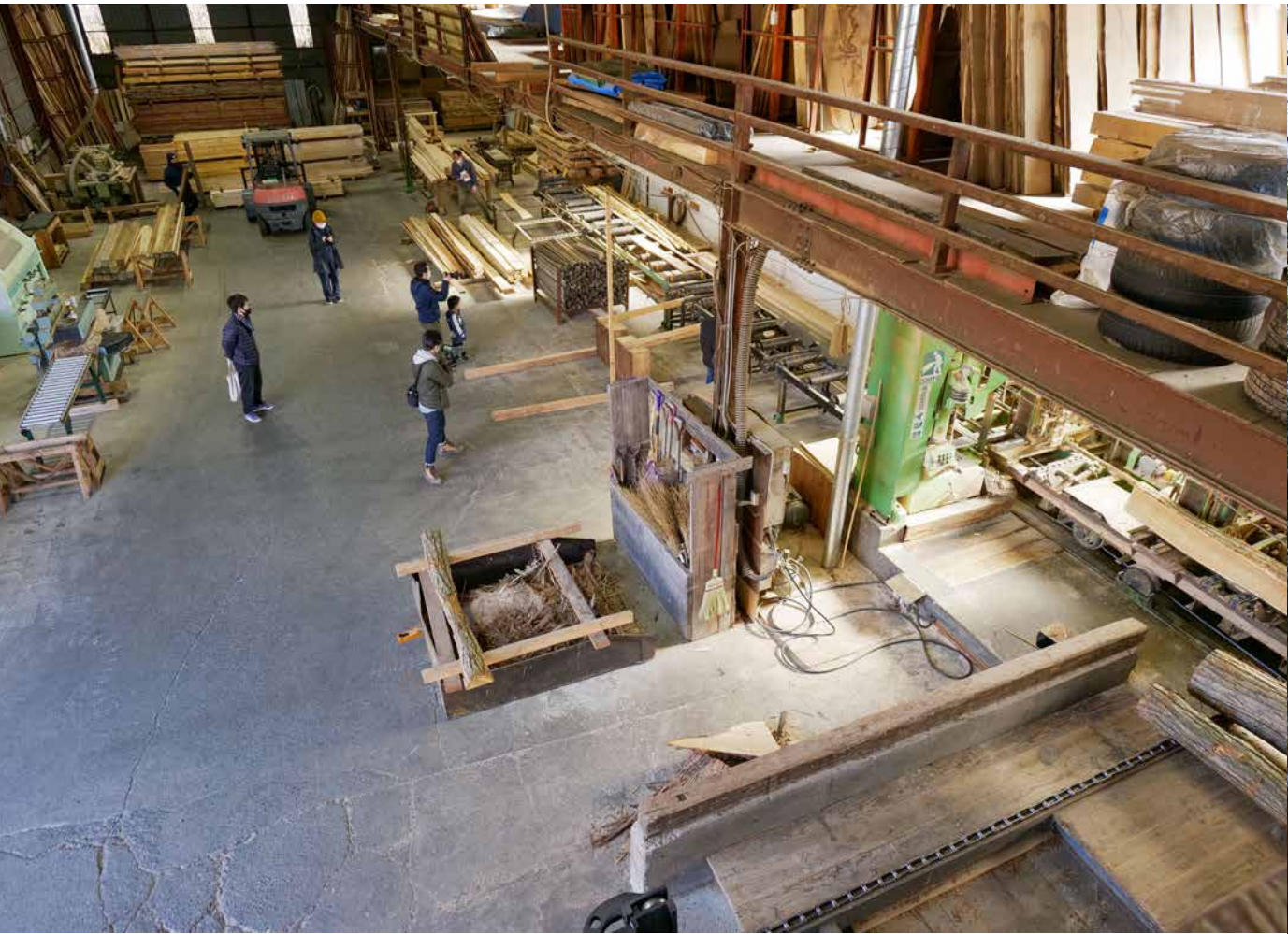
伊那谷ツアーで訪れた場所



島崎山林塾企業組合



ASOBINA



地域材を使うことにこだわる有賀製材さんの製材工場

島崎山林塾企業組合の北原さんが施業中の山林を案内



薪ストーブ、薪を販売する dld さん。
薪づくりと森の関係をお聞きました



有賀製材さんと木こりの金井さんと連携して
地域の木で自宅を建てた倉田さん



伊那谷の自然を使ったアクティビティを
展開する ASOBINA の呉本さん



地域の木を使ったものづくりの面白さを語る
やまとわの中村さん



丸太の直径を測り、どのようなサイズで
造材するのがいいか考える金井さん



伊那西小学校の千賀先生が学校林を使った
教育について話してくれました

伊那谷ツアーの様子

課外授業について

伊那谷フォレストカレッジでは、本講座の他に課外授業を実施しました。本来であれば、受講生に実際に伊那に来てもらい、森を舞台に活動されている方の元で共に学ぶ計画を立てていましたが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、そういった計画もできませんでした。

その代わりに、毎週のように平日夜に希望者で集まり、テーマを持ち寄って語り合う課外授業を行いました。事務局が森のプレイヤーの元を訪ねて、動画を撮影して受講生と共有したりして実施。本講座の中でも少人数で30分ほどディスカッションする時間がありますが、「足りない！」という声も多く、課外授業では思う存分に語り合いました。

2020年 12 / 18 20:00
授業の振り返りとディスカッション！
 第一回の課外授業として、森とものづくり、森と教育、2回の講座の中で、引っかけたこと、気になったことを語り合いました。

12 / 21 20:00
森とどんな関わり方をしたい？どんな関わり方をしている？会議
 受講生の中から、受講生同士が今どんなことをしているか知りたい！ということ、受講生と森の関わりについてディスカッションしました。

12 / 26 14:00
森と探究する学びの関係を考える アクティブ・ブック・ダイアログ
 森と教育の話で盛り上がった探究する学びを深掘りするために、アクティブ・ブック・ダイアログという手法を使って、探究学習と森の関係を考えました。

2021年 1 / 6 20:00
全国の山村を旅する林業ライターと、林業と森の今を語ろう
 受講生で森林・林業をフィールドに活動するライターの方をゲストにして、林業と森の全国の事例や森の疑問についてディスカッションしました。

1 / 18 20:00
森の100仕事企画会議 vol.1
 森に関わる100の仕事をつくることを目指して、こんなことやりたい、何かやりたい！という方の企画について話し合う企画会議を実施。



トレイルカッターの様子 (動画)



1 / 25 20:00
森とクリエイティブ企画「伝える」を考える
 受講生のクリエイターお二方をゲストに、「伝える」ことについてトークセッションを行いました。森のことを伝えていくには、どんなことが必要か考えました。

2 / 10 20:00
森の100仕事企画会議 vol.2
 企画会議第2弾として、別の方の企画のブラッシュアップ会議を実施。

2 / 25 20:00
そろそろカレッジが終わるので、好きなテーマで未来を語ろう
 カレッジも終盤になり、これからどうしようか？ということを受講生同士で話しました。

3 / 2 20:00
私が46歳で始めた林業のはなし
 受講生で実際に林業をはじめた方をゲストに、小さい林業をはじめた経緯や林業の楽しさ、難しさについてお聞きしました。

3 / 6 15:00
forest college クローキングイベント
 企画会議などで話してきた内容や受講生に作ってもらった映像の上映会などを最後に行いました。本講座でないにも関わらず40名近い受講生に参加いただきました。

トレイルカッター名取さんの森のアクティビティづくり
 南アルプス山麓を自転車で行くアクティビティ開発をしている名取さんの元を訪ねて、自転車と森の関係についてお話しをお聞きしました。

講師プロフィール

第1回

自然を活かすものづくりとは

講師：

●松本 剛さん

株式会社飛騨の森でクマは踊る代表取締役 COO
環境事業会社勤務を経て、2019年、株式会社トビムシに参画。2015年、岐阜県飛騨市に飛騨市と株式会社トビムシと株式会社ロフトワークで官民共同事業体「株式会社飛騨の森でクマは踊る（通称：ヒダクマ）」を設立、取締役就任。2016年、古民家を改装した滞在型のづくりカフェ「FabCafe Hida」をオープン。2019年より現職。世界中の様々な人たちが飛騨の森に関わる場と機会をつくり、その人々と個性豊かな広葉樹と飛騨の匠の技をかけあわせ、それぞれの都合とらしさを活かした持続可能なものづくりに取り組んでいる。

●丸尾有記さん

KITOKURAS 代表
飛騨・大阪・東京でプロダクトなどのデザインに携わったのち、2010年より実家である、材木屋、山一木材（香川県）の三代目としてKITOKURS というプロジェクトを立ち上げる。材木屋にカフェ・日用品・家具ギャラリー・設計室などを併設し、「木と暮らす」ことを伝えることについて取り組んでいる。携わった主なプロジェクトは、「more trees」（木のブローチ、プランターなど）、「KITOKURAS」（一輪挿し、百年杉トレイ、国分寺 K邸（住宅）など）

地域プレイヤー：

●中村 博さん

株式会社やまとわ取締役代表
長野県伊那市出身。高校卒業後、郵便局員を経て木工職人の道へ。地域の木材で木製品をつくることは職人ができる森林整備ではないかと考え、2002年より伊那谷産木材に特化した木工に取組む。2016年10月、「森をつくる暮らしをつくる」会社、株式会社やまとわを設立。プライベートでは、かんな削りの技術を競う全国的な組織である「削ろう会」の活動や、地元有志と共に週末林業を通じた地域づくりにも取り組んでいる。家具手加工1級技能士、西地区環境整備隊隊長、伊那市50年の森林ビジョン推進委員、第35回全国削ろう会信州伊那大会実行委員長。

第2回

キャリアデザインに

森を生かすには

講師：

●久保田雄大さん

四徳温泉キャンプ場（Waqua 合同会社）代表
長野県飯田市出身。中央大学経済学部在学中に、世界の田舎を旅した経験から「持続可能な経済へどうやってシフトするか？」を考えるようになる。メーカー社員として、アフリカ諸国で経済開発の仕事に携わる中、リーマンショック、311を経て、むしろ問題は先進国のライフスタイルにあると感じ始め、ふるさと伊那谷へUターン。中川村の古民家を借り、薪風呂、薪ストーブの生活を始める。「この村で文化・エネルギー両方の自給力のある田舎を創っていくために、自分ができることは何か？」と考えているうちに、2015年より森の中にポツンとある「四徳温泉キャンプ場」の経営を村より委託される。キャンプ場を「森を活かしてシゴトを創る場所」と定義。森林の六次産業化を目指す。一帯に植林されたカラマツを間伐しながら「出荷しないでその場で活かきる」ことにこだわり、丸太はコテージなどの建築、枝は薪にしてすべて販売。できた森林空間は、キャンプサイトに。ガイド育成のため研修も定期的に行い、キャンパーや、地元の子供達を対象に、環境教育のプログラムを実施している。こうした姿勢がユーザーの共感を呼び、長野県内でも屈指の人気のキャンプ場に。2020年「南信州キャンプセッション」を、キャンプ場経営者の仲間と立ち上げる。長期目標を「Sustainable Valley 2040」とし、地方分散型社会へと変化していくために、キャンプシーンからできることを提案中。

●近藤 百さん

愛農学園農業高等学校教諭
1986年兵庫県三田市生まれ。11世帯の山村で鍛冶屋の長男として育つ。大学卒業後、大阪で材木会社の営業マンとして働きながら「自分の手で作る頑丈な暮らしとはなにか」を模索しはじめる。縁あって2013年より愛農高校職員となり、果樹部の主任や日本史を受持つかわら、広報を担当。愛農高校が目指す「小さくて頑丈な暮らし」をキーワードに、全国で「愛農高校が一緒にできること」を提案している。家の風呂口とストーブは薪。

地域プレイヤー：

●富岡順子さん

コレカラボ-corecareerlab- 代表
1984年生まれ。10才から始めたソフトテニスにのめり込み、小中と全国大会に出場する。新潟高校時代も部活に精を出す余り勉強についていけなくなるが、それがきっかけでこれからの教育を考えるようになる。文教大学ではアクティブラーニングや心理学を学び教員免許を取得するも卒業後は地元の第四銀行に入行。在職中に産業カウンセラー、キャリアコンサルタントの資格を取得。その後結婚を機に退職するがアイデンティティークライシスを経験し、改めてキャリア教育の必要性を実感する。2014年に夫の仕事の都合で南箕輪村へ移住。現在は高校生や社会人のキャリア支援を行い、「生きる力」に繋がる学びを日々探究している。

第3回

森と人の関わりがうまれる

「まち」のあり方を考える

講師：

●植原正太郎さん

NPO 法人グリーンズ COO / 事業統括理事
1988年4月仙台生まれ。慶應義塾大学理工学部卒。新卒でSNSマーケティング会社に入社。2014年10月よりWEBマガジン「greenz.jp」を運営するNPO法人グリーンズにスタッフとして参画。2018年4月よりCOO / 事業統括理事に就任し、健やかな事業と組織づくりに励む。本業の傍ら、都会のど真ん中に畑をつくる「URBAN FARMERS CLUB」も展開中。循環型社会やサステナビリティについて勉強中。一児の父。

●岡野春樹さん

一般社団法人 Deep Japan Lab 代表理事 / 一般社団法人長良川カンパニー代表理事 / 株式会社電通
神奈川県平塚市育ち。慶應義塾大学総合政策学部を卒業後、電通に入社。自治体のブランディングや、地方創生を中心とした官公庁の国内外の広報に携わる。また、勤務時間外で日本を楽しむ旅をつくる「Deep Japan Lab」を立ち上げる。旅の活動で出会った岐阜県郡上市で、夜の川に入った衝撃がきっかけで移住。現在家族4人で源流域の暮らしを楽しむ。いのちよろこぶ、あそびを提供する一般社団法人長良川カンパニーを設立し、流域一体でのひとと自然の繁栄を目論む。

地域プレイヤー：

●田中聡子さん

伊那市地域おこし協力隊 / 伊那谷ふぃーる エディター
2017年、長年暮らした関西からUターン。現在、3才と5才の兄弟の母。伊那市地域おこし協力隊、(株)ローカルライフ伊那支店長、フリーの編集者・ライターと、協力隊、会社員、個人事業主の3つの仕事をかけ持つ。地域体感メディア「伊那谷ふぃーる」運営、「表現あそび教室」などの講座開催、在宅ワークの地域ママ向け支援など、「こどば、編集、地域」をキーワードに活動を行っている。

第4回

地域で育った木で生かす

建築を考える

講師：

●大庭拓也さん

株式会社日建設計 設計部門 アソシエイト アーキテクト Nikken Wood Lab 代表
1982年福岡県北九州市生まれ。福岡大学建築学科卒業 東京工業大学大学院建築学専攻修了
2007年日建設計入社。担当は、有明体操競技場・選手村ビレッジプラザ・渋谷区北谷公園・木質ユニット「つな木」など。受賞には環境大臣賞、林野庁長官賞、ウッドデザイン賞、グッドデザイン賞、JIA25年賞など。「つくればつくるほど生命にとって良い建築」を実務やラボの活動を通して実践中。

地域プレイヤー：

●倉田政人さん

建築設計室ヴェクトル
地元で設計事務所を開設して14年目。「地産材の利用が増えることを願い、住宅設計のお手伝いをしています。日々の暮らしの中で木とのかかわりが、地産材・里山との繋がりに直結していることを実感し、気張らないふだん使いの木の暮らしをすすめています。ウッドボイラーは、地産材への関心・活用と新たな利用価値を持つきっかけになればと提案するものです。（蓄熱タンクとの組合せで、近隣建物へ温熱供給・共有しています）ゆっくりでも里山・地産材へ関心が向き、少し前まで当たり前だった、木の暮らし・里山への価値観を取り戻せたら」と願い奮闘しています。

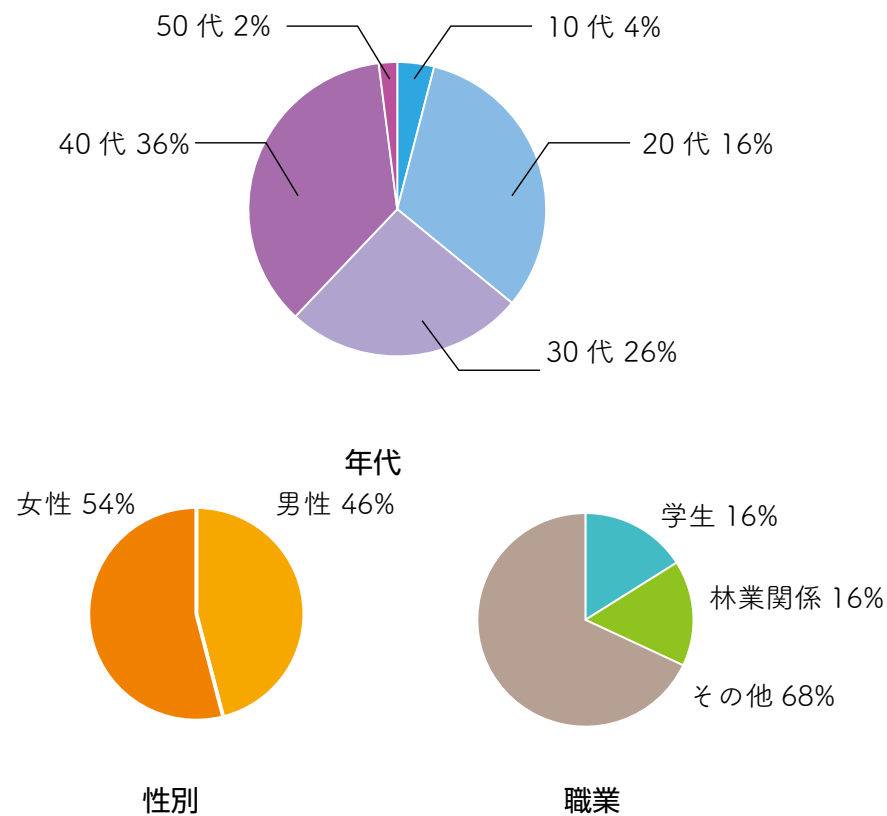
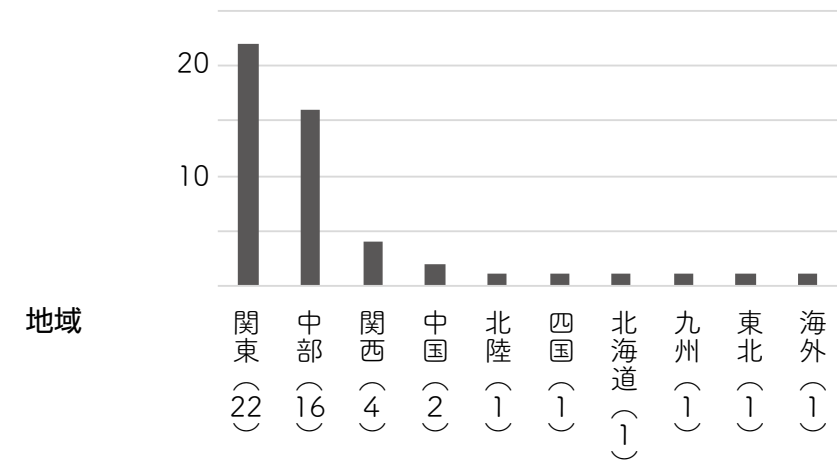
●金井溪一郎さん

金井山素材代表
主に上伊那地域の森林所有者さんから森林整備、経営を受託しています。丸太販売だけでなく、製材所さんと協働で地域産住宅材の販売、赤松の枝、白樺の皮など林産物の販売に力を入れています。補助金に頼らず、林産物の売上と山主さんの投資によって森を循環させる林業を実践しています。森林所有者が、自身の山から利益を得られるように、山を楽しめるように、山に期待を持てるように。そんな森づくりのお手伝いをするというのが基本的スタンスです。しかし、楽しみより、山に対する不安、懸念を抱く山主さんが多いのが現状です。山主さんと直接対話しながら山を含めた自身が暮らす地への愛着を深められることが願いです。1984年、伊那市生まれ。

受講生について

フォレストカレッジの一期生は、日本全国から様々な職業の方々が集まってくれました。学生からエンジニア、クリエイター、林業家、住職、木材会社、造園、建築士…など。こうした人たちと森のことを話しあうことで、地域側で見えていなかったことも見え始めてきました。

森に関わる人が多様化していくことで、森に対して感じるものが多様であることにも気付かされます。様々な業種、業界の方々と森を介してコミュニケーション、コラボレーションしていくことで新しい価値が生まれてくると実感します。



第6回

これからの林業と生業を考える

講師：

●原 薫さん

株式会社柳沢林業代表取締役／一般社団法人ソマミチ代表理事
1973年神奈川県川崎市生まれ。筑波大卒業後、木挽き職人に魅せられ1997年静岡県井川森林組合に就職し林業の道へ。狩猟免許、銃砲所持許可も井川時代に取得。1999年に長野県に移住し、2003年柳沢林業入社、2013年より現会長より事業承継をし、「信州松本平の豊かな風景をつくる」をコーポレートメッセージに掲げ、木材生産を中心に新たな林業の可能性を模索中。また、2017年一般社団法人ソマミチを設立し、山の多様な価値の創造と林業木材業の六次産業化を通して、「木を使う社会の仕組みづくり」を目指す。

●田口壽洋さん

合同会社よりも代表社員／一般社団法人 STAGE 代表理事
1978年神奈川県生まれ。麻布大学獣医学部卒業後、広告業界・アウトドア業界を経て、島根県津和野町の自伐型林業集団『津和野ヤモリーズ』や『島根わさびブランド推進協議会』の立ち上げなど、自伐型林業を実践しながら、中山間地域での仕事創出のサポートを行政と一緒にやる。現在は、島根県津和野町での自伐型林業・山葵事業のサポートと並行して、山口県阿武町で地方創生事業のコーディネートを実施。キャンプ場設立・魚の付加価値流通・自伐型林業研修とモデル林創出・無角和種の生産振興など、中山間地域での仕事創出に係る各種事業推進を行っている。

地域プレイヤー：

●北原淳史さん

島崎山林塾企業組合
小学生の頃、学校の環境委員長という役を任せられたことで、環境問題へ興味を持つ。その後、持続可能なモノ作りをテーマにしていた信州大学工学部へ進学。木材を扱う研究室に所属したことで、森林・林業へ興味を持つ。大学卒業後、山造りに関する講習会を運営していた電子部品メーカーへ就職。同講習会を受講しながら4年間製品開発とマーケティングを担当するが、もっと山と深く関わりたいと思い、退職。それから現在に至るまで、個人事業主として島崎山林塾企業組合へ所属し、複数の所有者の山をまとめて、道作り・伐採・植林・草刈り等、一貫した山造りを行っている。また、道路や建物付近に生えている危険木の除去作業も行っている。

第5回

地域の木を地域で使うための製材所の可能性を探る

講師：

●谷知大輔さん

パワープレイス株式会社
1983年生まれ 奈良県奈良市出身。2009年三重大学大学院 共生環境学研究科 博士前期課程 修了。大学で林学を学んだ後、住宅向けの内装建材メーカーに入社し、国産木材製品のマーケティングを担当。メーカー勤務で木材生産と利用の現場の意識にあまりに大きな乖離を感じ、如何にこの間を繋ぐかを考えるようになる。退職後、非住宅市場へ国産木材を提案、コーディネートする会社に合流し、FSC森林認証材や国産木材の提案を行う。2017年には地域木材の流通を支援するNPOを設立し、同年、当時パワープレイスに在籍していた武蔵野美術大学の若杉教授にお声がけいただき、山形県高島町の図書館および屋内遊戯施設の木材調達業務に従事。町産木材と地元製材所、地域の加工業者により建材加工を行い、図書館では町産木材の利用率99%を達成した。地域木材流通の最適化を通じて地場産業の活性化や人と人の繋がりを再構築したこの取り組みは、タニチシステムと呼ばれ令和元年度版の森林・林業白書でも紹介された。現在はパワープレイスに所属し、人と木の繋がりをデザインし、より豊かな未来に繋げていく活動を行っている。

●ヤマサキ マサオさん

SHARE WOODS 代表
1970年生まれ。大学卒業後出版社勤務を経てドイツ木材メーカーの輸入代理店に勤務。2009年に間伐材を活用した打楽器「カホン」を手づくりする「カホンプロジェクト」を創設し、日本全国の森との関わりを深め全国各地の地域材を活用したプロジェクトに携わる。2013年に、木に関わる情報と販売のプラットフォーム「SHARE WOODS」を設立。全国各地の森林や林業関係者との関わりを深め、地域材を活用したカホンづくりのプログラムを展開し、森林とまちをつなげる木材コーディネートを行う。

地域プレイヤー：

●有賀真人さん

株式会社有賀製材所代表取締役
長野県伊那市にて小さな製材所と工務店を営む。祖父・父と代を引継ぎ3代目。30年程前より、当時は建築材としては見向きもされなかったカラマツ材を積極的に住宅に使い始め、地域材100%での家作りを手掛ける。現在は自社のみならず、県内外の大工、工務店、設計事務所からの注文に応じ、伊那産の丸太を製材し製品の販売も行う。三重県青山町生まれの伊那谷育ち。中学卒業後、県外の高校、大学と進学し、大阪で約3年間社会人として過ごした後、地元伊那へ戻り家業の製材所を継ぐ。妻と3人の子供と5人暮らし。趣味はマンガと音楽と時々料理。かなりのインドア派。1971年生まれ49歳。

山と、森と、木と、暮らす。
それは、不確かさやリスクを受け入れること。
何十年、何百年という時間軸を持つこと。
人と自然の健全なバランスを探ること。
生きるチカラと生かされている感覚を取り戻すこと。
自分たちの国の森に、もっと頼ろう。
自分たちの土地の木を、もっと面白がろう。
これからの世界を、よりよく変えていくために。
森と人のいい関係を取り戻すだけでなく、
これからの時代の、新しい関係を創造していこう。
暮らしと森は、もっとつながれる。
そのために、まずは人がつながろう。
豊かな森をつくるのは、多様な樹種だけではない。
森に新たな価値を植え付ける、多様な人種を増やそう。
森を舞台にいろんな人がつながれば、
ワクワクする何かがきっと生まれるはず。
森と人の豊かな未来を育てるために。
つながりの苗木を植え続けよう。
INA VALLEY FOREST COLLEGE Writing : 吉川和志



受講生クリエイターとつくる森の映像
フォレストカレッジの受講生でクリエイターのねぎしゆうきさんとコピーライターの吉川和志さんのお二人に協力して頂き、ムービーを制作しました。
吉川さんに動画用のコピーを作ってもらい、ねぎしさんが撮影・編集を担当。
講座を通して感じたことを表現してもらいました。

山と、森と、木と暮らす。
INA VALLEY FOREST COLLEGE



森に関わる100の仕事をつくる

有賀真人 (INA VALLEY FOREST COLLEGE 協議会会長)

「森に関わる100の仕事をつくる」こんなキャッチコピーから始まった伊那谷フォレストカレッジ。最初にこの活動の趣旨説明と共に協議会のメンバー職を打診された時は、ただ単純に「面白そう!」そんな直感だけで参加させて頂くことを即答させて頂きました。

若さと意気込み溢れる協議会メンバーの熱い思いを少しずつ形にしながら手探りでスタートしたこのフォレストカレッジでしたが、結果、業界もエリアも年代も性別も飛び越えて、全国各地から本当に沢山の皆さまにご応募、ご参加いただき、森の価値の再発見について一緒に学ぶ機会を与えられたこと、本当に感謝の思いで一杯です。

森の価値について、とかく木材・林業・建築といった、お決まりの業界からだけの視点で語られがちなテーマを、本講座では行政・教育・観光・飲食・農業・情報・様々な業界の視点から、そして何より「自分たちの暮らし」の中からアプローチし深掘りしてきました。

講座の回数を重ねる毎に、それぞれの立場からだけでは見

えていなかった気付きや問題点が浮き彫りになり、それと同時に、森の価値を高める為の可能性やヒントが次々と生み出されてきました。是非、本講座で生み出された沢山の小さな種を、それぞれの場所で、それぞれの繋がりの中で共に温めて頂き、全国各地に新たな芽が育っていくことを心より願っています。

今年度の講座を開講するに当たり、全国各地から参加してくださった各回講師の皆さま、運営資金面で全面的にバックアップしてくださっている県、市を始めとする行政関係者の皆さま、実質的な運営を一手に引き受けてくださっている株式会社やまとわの奥田さん、榎本さん、そして本講座に参加して下さった伊那谷と全国各地の参加者の皆様に改めて感謝を申し上げます。いつかこの伊那の地で実際に皆さまとお会い出来る日が来るのを楽しみにしています。そして、引き続き来年度以降の活動も皆さまのご協力を宜しく願います。

森に備わる価値の再発見

倉田政人 (INA VALLEY FOREST COLLEGE 協議会副会長)

地元で育つ木をもっと建物に・暮らしに取り入れられないか、また建築士の立場としてどう関わることが出来るのか日々奮闘しています。自社導入のウッドボイラーも地元の山の恵みを活用した暮らし方を提案する取り組み一つで、森や里山に関心を寄せる切っ掛けづくりになればとお伝えていますが、なかなか思い届かずにいました。

ちょうどその頃、フォレストカレッジ協議会員のお誘いを受け、当初は自身が抱えるモヤモヤを解消する手掛かりを得られればと思っていました。「伊那市50年の森林ビジョン」実現を基に「伊那谷を森に関わる産業のメッカにする」と言うコンセプトから、学びの場を設ける趣旨に驚き、ぐっと心惹かれて勧誘の感謝を込め参加させて頂きました。

当初のコース分けによるカリキュラムの計画から、感染対策上、オンライン上での開催という大きな変更となりましたが、実務運営いただいた(株)やまとわさんの舵取りのお蔭で、結果諸々の枠を超え多様な立場の方々にご参加頂けた上、離れた場所に居ながらも講師・生徒を繋ぐ良い講義プラットフォームになりました。

講義はオリエンテーションから講師陣の本音を問うクロストークに画面越しに頷きながら聞き入り、受講生を交えたグループディスカッションではなかなか気付けな新鮮な意見にヒントを得ることが多く、毎回メモ書きが何枚にもなりました。

自分にとって学ぶより、気づきと共にそもそも森に備わる価値の再発見でした。また知ることにより一層の興味や関心を森へ傾けることが出来、さらに次世代へ繋ぐ想いになると感じています。

最後にフォレストカレッジ受講生の皆様並びに関係者の皆様へ、回を重ねることに意見交換も深みを増し幅のある内容となりました、まさに皆様と共に造り上げたフォレストカレッジだったと感じています。心より感謝申し上げます。またここで出来た繋がりを大切にしていきたいと思います。今後何らかの機会でごちらへ足が向くときは是非伊那へお立ち寄りください。伊那の魅力と共にご案内させて頂きたいと思えます。

本当にありがとうございます。今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。



森と共に生きていくには、
森と私たちの暮らしの関係性を回復していくことが大切です。
ものづくり、教育、まちづくり、建築、素材、生業。
今回はこの6つのテーマで講座を進めてきました。

その中で、森の可能性がたくさん拓け、また課題もたくさん見えてきました。
森の可能性に対してまっすぐに挑戦し、課題に対して、真摯に向き合っていく。
伊那谷フォレストカレッジは、そういう担い手を育てていきたいと思えます。



50年の森林ビジョン Ina Valley Forest College 協議会委員 名簿



小林健吾
長野県上伊那地域振興局
林務課 課長補佐兼
林務係長



三木敦郎
信州大学
学術研究院農学系 助教



倉田政人
建築設計室ヴェクトル



有賀真人
株式会社有賀製材所
代表取締役



富岡順子
コレカラボ
-corecareerlab- 代表



田中聡子
伊那市
地域おこし協力隊



北原淳史
島崎山林塾企業組合



金井溪一郎
金井山素材

企画・運営



榎本浩実
株式会社やまとわ



奥田悠史
株式会社やまとわ



唐木啓子
株式会社やまとわ



木村彩香
飯島町
地域おこし協力隊 OG



下鳥大輔
伊那市
地域おこし協力隊



伊那谷フォレストカレッジ
主催：INA VALLEY FOREST COLLEGE 協議会

事務局：伊那市農林部耕地林務課 50年の森林推進室
〒396-8617 長野県伊那市下新田 3050
電話 0265-78-2121 (株式会社やまとわ内)
MAIL : info@forestcollege.net
https://forestcollege.net

INA VALLEY FOREST COLLEGE ANNUAL REPORT 2020
発行日：2021年3月31日
編集：奥田悠史 (事務局)、榎本浩実 (事務局)、松永大地 (ポケット)
取材・執筆：田中聡子、北埜航太
映像：小口広希 (pinto)
デザイン：ごみひづる (インク舎)
イラスト：マメイケダ

編集・発行：伊那市農林部耕地林務課 50年の森林推進室
MAIL : info@forestcollege.net

事務局：伊那市農林部 50年の森林推進室

肩書きや所属は、2021年3月現在のものです。

木 木とみんなと生きてく

INA VALLEY FOREST COLLEGE 協議会

